俺の嫁は萌えもん

Cord-ヤゴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の嫁は萌えもん

【Ｎコード】

Ｎ１６１４Ｆ

【作者名】

Ｃｏｒｄ－ヤゴ

【あらすじ】

某月某日、主人公の「憲明」はマサラタウンで初めての萌えもんを貰う。そしてその日を境に、憲明の人生は今までとは違う、とても素敵なものとなる・・・のか？

嫁との出会い（前書き）

この小説はポケモン擬人化「萌えっ娘もんすたぁ」の小説です。また、一部ラブコメ的要素を含む可能性があります。そういったものを好まれない健全者は、速やかにご退出下さい。じゃないと、祟りますよ・・・？

嫁との出会い

これは、数年前の出来事を文章として起こしたものである。

某月某日、午前7時59分。俺は珍しい時間に目を覚ました。いつもは9時以降に起きるのだが、なぜかこの日はそれよりも約1時間早く起きてしまった。

「むにゃ、何でこんな時間に・・・？もうちょっと寝よう・・・。」

俺がもぞもぞと布団にもぐりこんだその時、階下から母の声が聞こえてきた。

「憲明ー！オーキド博士から電話よーー！」

オーキド博士？あの変人のか？何なんだ一体。この間借りた本は返したぞ？俺は取り敢えず、その電話に出るため階段をどたどたと駆け下りた。

「もしもし、憲明です。」

「おお、なんだか眠そうじゃの！眠気覚ましにちょっとワシの研究所に来てくれんか？」

「ええー、何でですか？悪いですけど、今日はちょっとパスってことで・・・。」

「なんじゃあ、お前の気に入りそうなものがあるのに・・・。これを見れば、今日1日をとても充実したものとできるのじゃぞ！」

「今日1日をどう充実に過ごすかは俺の自由だと思いますが・・・。」

こんな感じで俺は何度も断ったのだが、そんなことであの人が諦めるはずもない。俺はとうとう折れ、博士の研究所へ行くことにした。

「ったく、何なんだ一体・・・。まぁいいや、今日も暇になりそうだったし、それを潰すんだったら安いもんだよな。」

俺はそんなことを言いながら素早く着替え、オーキド博士の研究所

へ向かった。

　オーキド博士の研究所は我が町、マサラタウンの端っこにある。この研究所、マサラタウンにあるにしてはとても立派なところだ。いつからあるのか知らないが、聞くところによると俺の母がまだ幼いころには既にあったという。・・・あの博士、一体いくつだ？

「・・・と、着いたな。結構近くだからいろいろ考える時間も無いな。・・・まぁいいや。とにかく中に入ろう。」

俺は研究所の戸を開け、中に入った。研究所の中では、博士の助手達があせあせと働いていた。どうもこの人たち、この研究所に住み込みで働いているらしい。いやはや、世の中には物好きな人もいるんだな・・・。俺は助手の人たちの邪魔にならないように気をつけながら、奥へと進んでいった。やがて博士の部屋に着くと、そこには見知った顔がいた。

「広志？何でお前がここに？」

「ん、憲明か？お前こそなんでここに来たんだ？」

こいつの名は広志。オーキド博士の孫で、俺の幼馴染だ。こいつ、勝手に俺のことをライバル視して、何かと勝負を挑んでくる。その際はわざと負けてやるのだが、極稀に本気で勝負してやることもある。・・・確か、今までに勝負を挑まれたのは１００回以上あったと思うが、俺の戦跡は８勝９０敗２分けくらいだと思う。ちなみに、この８勝はいずれも本気で挑んだときの結果だ。つまり、実力で言えば俺のほうが上、ということになるが・・・。あんまりこういうこと言っちゃいけないよな。うん、自重しよう。

「俺は博士に呼ばれてきたんだが、・・・もしかしてお前も？」

「ああ。なんか朝っぱらから電話があって、それで来い、って言われてきたんだけど。・・・どうもじいちゃんどっかに出掛けたらしいんだ。」

「出掛けた？どこに？」

「そんなの知るかよ。ということで憲明、お前じいちゃん捜して来いよ。」
「はぁ！？」
こいつ、何を言っているんだ？普通こういうのは孫が行くもんだろう？何でただの知り合いってだけの俺に言うんだ！？ふざけんなよあぁ！！？

・・・そんなことを柔らか～く広志に言ったが、結局俺が捜す羽目になってしまった。俺はブツブツ悪態を付きながらも、博士を捜した。・・・まったく、あのボケ老人はどこに行ったんだ？
「は～か～せ～、どっこですか～～？・・・って出てきたら苦労ないよなぁ。どこに行ったんだ？」
「呼んだかの？」
突然背後で声がし、俺は飛び上がった。誰かと振り向くと、オーキド博士が満面の笑みで俺の後ろに立っていた。こ、このジジィは、一体どこから沸いて出てきたんだ・・・？
「あの、研究所に行ったんですが博士が見当たらなかったんで捜してたんですけど・・・。」
「ワシを？・・・・・・・・・・・・おお、思い出した！ちょっとこっちに来い！！」
そう言うと、博士は俺の襟首を掴んでずるずる引っ張っていった。い、痛い痛い！首絞まるぅ！！

「遅いぞじいちゃん！」
研究所に戻ると、広志が博士の部屋の前に座っていた。こいつ、何が遅いぞ！だ。んなこと言うくらいならお前が捜せばよかったのに・・・！！
「広志か？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・そうじゃ、思い出した！ワシが呼んだのじゃった！」
博士はワッハッハッハ、と笑うと、部屋の鍵をガチャリと開け、中へ入っていった。・・・この人は、朝自分が何をしたかも覚えていないのか・・・？俺は唖然としながらも博士の部屋へと入っていった。広志もそれに遅れまいと駆け足で入ってきた。
「で、博士。用ってなんですか？」
「うむ、お前達にあるものを渡したくてな。」
「あるもの？」
俺たちが顔を見合わせて疑問に思っていると、博士は妙な機械からボールを3つ取り出し、机の上に置いた。
「このボールに1人ずつ萌えもん、つまり「萌えっ娘もんすたぁ」が入っておる。左からフシギダネ、ゼニガメ、ヒトカゲの順じゃ。このうちどれか1つを選びなさい。」
「ぇと、それは、俺たちにくれる、ってことですか・・・？」
「いかにも。では、まず憲明。選びなさい。」
ま、まさか萌えもんがもらえるとは・・・。
ここで、萌えもんについて説明させてもらう。萌えもんと言うのは、「萌えっ娘もんすたぁ」の通称で、この世界にいる人間以外の生物のことだ。だがいずれも可愛らしい女の子の姿をしていて、ちゃんと言葉も喋れる。ある人はこの萌えもんを仲間にし一緒に旅をしたり、ある人は共に暮らしたり、またある人は萌えもんと結婚したりもする。俺もこの萌えもんには昔から興味があり、いつか絶対に捕まえてやりたいと思っていたのだが・・・、・・・・まさか、こんな形で萌えもんをゲットする日がこようとは・・・。
俺は取り敢えず、ボールの置かれた机の前まで来た。・・・しかし、こういう状態で決めろといわれてもなぁ・・・。せめてボールから出したいのだが・・・。
「それは駄目じゃ。ボールから出したその瞬間から、そのもんすたぁのマスターになってしまうからのぅ。せめてじっくり選びたいじゃろ？どうしてもと言うなら、ここに写真があるからこれで見て決

めなさい。」
俺は博士から3人の写真を受け取り、それを見てみた。・・・・・・・・・ふ、ふむ。どの子もなかなか捨てがたい・・・。これはきついぞ、まさかこの時点でここまで悩んでしまうことになるとは・・・。俺は意を決し、フシギダネの入ったボールを手に取った。
「俺はこの子にします。いいですよね、ボールから出しても？」
「うむ、構わんぞ。では広志。次はお前じゃ。・・・・・・」
俺は、フシギダネをボールから出した。フシギダネはボールから出るとくぁああ・・・、と可愛らしいあくびをし、周りをキョロキョロした。やがて俺に気付くと、慌てて立ち上がった。
「ぇと、あなたが私のますたーですか・・・？」
「うん、そうだよ。俺の名前は憲明。よろしくね。」
「は、はい！よろしくお願いします！！」
フシギダネはペコッ、とお辞儀をした。・・・う、うわ、くらぁ・・・。
「よっしゃ、俺はこいつにするぜ！出て来い、ヒトカゲ！！」
広志はどうやら、ヒトカゲを選んだらしい。しかし・・・、やけに早いな。まぁこいつのことだから、大して考えてないんだろう。
　広志が投げたボールから、勢いよくヒトカゲが現れた。そのヒトカゲは元気いっぱいに走ると、広志の胸に飛び込んだ。
「あなたが私のますたーでしょ？よろしくね！！」
「おぅ、よろしく！あはは、お前も俺と一緒で元気がいいな！！あっちのフシギダネとは大違いだ！」
広志はそう言いながら、俺たちを横目でチラッと見た。恐らく俺を挑発しているんだろうが・・・、残念だったな。俺は他人の挑発には乗らないんだ。しかし、フシギダネは自分を貶された事で相当ショックを受けているらしかった。その瞳は、うるうるしていた。
「大丈夫だよ、フシギダネ。お前はお前、ヒトカゲはヒトカゲさ。俺はこういうお前が好きだぞ？」
「でも、なんだか悲しいです・・・。」

フシギダネはついに、泣き始めてしまった。広志はそれを見ると、あはははは、と高らかに笑い出した。
「憲明、そいつを選んで残念だったな！そいつがパートナーだったら、萌えもんリーグにも参加できなさそうだぜ！」
フシギダネはより一層、ワンワン泣き出した。・・・流石にここまで来ると、いくら温和な俺だって怒るぞ。それは俺が馬鹿にされたからじゃない、フシギダネが馬鹿にされたからだ・・・！！
「おい広志。いくらなんでも言っていいことと悪いことがあるぞ。このフシギダネには何の罪も無いのに、そこまで言うことはないじゃないか！」
「いいや、罪はあるさ。お前に選ばれてしまったことが、このフシギダネの罪なんだよ！！」
「ふざけるな！そんなのフシギダネにはどうしようもなかったことじゃないか！」
広志は、そこでにやっと笑った。
「ほ～ぅ。そこまで言うんなら、そのフシギダネの力を見せてもらおうか。萌えもんバトルでな！」
「上等だ！フシギダネ、行くぞ！お前を馬鹿にしたやつを、こてんぱんに叩きのめすんだ！！」
フシギダネは、目に涙を溜めながらも力強く頷いた。・・・広志、今までお前には手加減して負けてやってたが、今度ばかりはそうはいかないぞ。今日から、お前に対する手加減は一切なしで、本気で戦ってやる！
「行くぞ、ヒトカゲ！あいつを倒すんだ！！」
「了解、ますたー！」
「フシギダネ、こんなやつに手加減は一切無用だ。本気で叩きのめしてやれ！！」
「うん！！」
そして俺たちは、人生最初の萌えもんバトルを開始した。

続く

嫁との出会い（後書き）

はい、どうも皆さん。初めての小説です。まぁ初めてって言っても、それはここでの話なのですが。実際には私のＨＰで少々出してます。そのいずれもこの小説以下にｇｄｇｄなのですが、そこは気にしないで下さい。私のＨＰ→ｈｔｔｐ：／／ｉｌｏｖｅｍｉｓｕｔｉ．ｗｅｂ．ｆｃ２．ｃｏｍ／

さて、この小説ははっきり言って続くかどうか分かりません。自分的には続けたいんですが、はてさてそう上手くいくのか・・・。ま、続いてたら見てやって下さい。

旅立ち（前書き）

今回は旅立ちまでの道のりがちと長いかもしれないです。あと、ちょっと今回はムラムラしてたんで、一部お見苦しいところがあるかもしれません。そこはご了承を。

旅立ち

「ヒトカゲ、フシギダネにひっかく！」
広志は、ヒトカゲにひっかくを命じた。しかし俺のフシギダネは、寸でのところでよけた。
「フシギダネ、思いっきり体当たりだ！！」
「はい！」
フシギダネは、ヒトカゲに渾身の力で体当たりをした。ヒトカゲはよけることができず、ばたっと倒れた。どうも、急所に当たったらしい。広志は目を丸くして、ヒトカゲに駆け寄った。
「ヒトカゲ！だめだ、気絶してる・・・。」
「勝負あったな！さぁ、フシギダネに謝ってもらおうか！！」
「くっ・・・！！」
広志はフシギダネになかなか謝れないでいた。まぁ、それも無理はないだろう。何せ俺の萌えもんである上に、こいつのプライドは、エベレストよりも高いほどなのだ。フシギダネに謝るという事は即ち、俺に負けたも同然の事。以前俺に負けた時も、決して負けを認めなかった。そんな奴が、「謝る」なんてことできるだろうか。案の定、広志はフシギダネに謝ることなく、研究所を後にした。
「仕方の無い奴じゃのぅ・・・。憲明、広志に代わって、すまんかったな。」
「俺に謝られてもどうしようもないです。謝るんならフシギダネに謝ってください。」
「いいえ、いいですますたー。あの人を倒したおかげで、すっきりしました。」
フシギダネはそう言うと、にっこり笑った。俺はちょっと、まぁ、アレだったが、フシギダネがそう言うのならば、それでよしとすることにした。
「じゃ、俺たちも行こうか。」

「はい！」
「では、気を付けて行くんじゃぞ！」
オーキド博士は、研究所の外まで見送りしてくれた。今までは頭のおかしな博士、くらいにしか思ってなかったが、このことでちょっと見直した。取り敢えず常識はあったんだなぁ、と。

「ますたー、これからどこに行くんですか？」
「う～ん、そうだな・・・。ひとまず俺の家に行くか。母さんにもお前を紹介したいしな。」
ということで、俺たちは家に行くことにした。
（戻ったらまずすることは、フシギダネの紹介だな。その後は一旦休んで、それからマサラタウンを出よう。）
俺は、家の戸を開け、フシギダネを中に入れた。フシギダネは、俺の家の中を物珍しそうに見ていた。
「母さんただいま。」
「おかえり。あら、その子は？」
「は、初めまして、フシギダネです！よろしくお願いします！！」
フシギダネはぺこっとお辞儀すると、にこにこ微笑んだ。
「オーキド博士から貰ったの？」
「うん。何を考えてのことなのか、いきなりくれるって言ってね。」
「そう。・・・・・ふふっ、可愛い子でよかったわね？」
母はそう言うと、クスクスと笑った。・・・何を考えている？
「じゃ、フシギダネちゃん。憲明をよろしくね。」
「はい！」
「じゃ、ちょっと休んでくるよ。フシギダネ、おいで。」
「はい。」
俺が階段を上ろうとすると、母が何かを思い出したかのように俺を引きとめた。
「憲明、あんまりガンガン攻めちゃダメよ。たまには、向こうを優

先させることも重要だからね？」
「な、何言ってやがる！やらないから、間違っても！！」
「ますたー、どういう意味ですか？」
「まだ分かんなくていいよ！知るには早すぎる！！」
フシギダネは不思議そうに、首を傾げていた。・・・そうか、母の目論見が分かったぞ。そりゃもちろん、俺だってこの子に何か惹かれるものがあったんだ。でもやっぱりまだ早すぎるだろｊｋ。っていうか、俺の母はいつからあんなキャラになったんだ！？今までこんなこと無かったのに・・・！
「・・・と、頭の中で変なこと考えてたらもう部屋が目の前だったぜ。」
「変なこと？」
「い、いや、なんでもない。」
「？？」
フシギダネはまたも首を傾げた。なんか、さっきから言ってはいけないことばかりを話してるから、フシギダネだけ除け者になってしまってかわいそうだ。何か、フシギダネが話に参加できる話題は無いものか・・・。
「そう言えば、フシギダネはどうしてオーキド博士の研究所に？」
「それはですね、私がマサラタウンの外で怪我をしているところを助けてもらったからです。他の子は知らないけど、多分、みんな同じような理由で研究所にいたんだと思います。」
「そうだったのか・・・。博士、意外といい人なんだな。」
「はい。あの後もよくしてもらってました。」
俺はてっきり、博士が何か良からぬことをしているのではないか、と思っていたが・・・。まさかの博士いい人話に驚いた。そう言えば、残ったゼニガメはどうなるのだろうか。もう元気になっているだろうし、外に帰されるのかな。
「多分、そうだと思いますけど。でも、あの子のことだからこのまま研究所に残るかもしれません。」

「「あの子のことだから」ってことは、フシギダネはゼニガメと話したことがあるのか？」
「はい。ヒトカゲとも話したことがあるんですが、その時はいっつもいじわるされてました・・・。」
「なるほど、小さい頃の広志と同じだな。・・・まぁ今も変わらないんだけど。やっぱり、似たもの同士何か惹かれあうものがあるのかな。」
「そうなんですかね・・・？」
と言うことは、俺たちもどこか似ているのだろうか。今はまだ分からないけど、旅をしていればいずれ分かるだろうな。

その後、俺たちは雑談をしながら過ごしていた。
「・・・と、もうこんな時間か。そろそろ出ないといけないかな。」
「そうですね。それで、まずどこに行くんですか？」
「まず、隣町のトキワシティでいろいろ買わないといけないから、そこだな。」
「トキワシティ・・・？」
フシギダネはどうやら、トキワシティのことを知らないようだった。まぁ俺も、トキワシティのことは人から聞いたくらいにしか知らないのだが。確か、マサラタウンよりも栄えていて、ジムもあるのだとか。更に、萌えもんリーグに参加するために通過しないといけないチャンピオンロードに続く道もあり、萌えもんトレーナーにとってはとても重要な町らしい。・・・俺も、いずれ萌えもんリーグに参加するだろうし、しっかり精進しないといけないな。
「よし。じゃ、行こうか！」
「はい！！」

「気をつけて行ってらっしゃいね～！」

母は旅立つ俺たちを笑顔で送ってくれた。・・・母さん、俺が帰ってくるまで1人だし、大丈夫かな・・・。・・・あ、そうだ。近くの草むらで何か萌えもんをゲットして、それを母さんにあげよう。そうすれば、寂しくないはずだ。・・・・・父さんがいれば、母さんもこんな思いをすることも無かったろうに。

俺の父は、俺が物心着く前にどこかへ消えてしまった。書置きが残されていて、そこにはただ一言、『ホウエン地方に行ってくる』とだけ書かれていたらしい。あまりにも突然だったため、母はそのことを受け入れるのに相当時間がかかったそうだ。

「ますたー・・・？」

「ん、え？・・・どうした、フシギダネ？」

「さっきから暗い顔してたんで、そうしたのかな、って思って・・・。」

どうやら、随分と暗い顔をしていたらしい。フシギダネに変な心配をかけてしまったな・・・。

「ごめんよ、大丈夫だ。さ、トキワシティに急ごう！」

「はい！」

そして俺たちは、マサラタウンを出た。

続く

旅立ち（後書き）

さて、お楽しみ頂けたでしょうか。憲明のお母さんは今後もこんな感じで行こうかと思います。ふふ、そのうちこの小説もＲ指定されて、削除されるかもしれませんね・・・。まぁその時はその時です。

でですね、ここでちょっとプライベートなことを。この小説の主人公、憲明の嫁はフシギダネですが、私本人は違います。いや、フシギダネも好きですけどね？私の嫁はピカチュウですかね。あのノースリーブに惹かれるものが・・・。まぁあくまでピカチュウは俺の嫁、って言うのは「萌えもん」というカテゴリの中での話ですので、そこはご理解を。他には、「東方Ｐｒｏｊｅｃｔ」よりミスティア・ローレライ、「女神転生」シリーズよりアリス、・・・こんな感じですかね？以上が私の嫁です。う～む、ピカチュウは他にもいっぱい生息（？）しているからいいものの、他は全て１人しかいないから嫁論争が耐えないなぁ・・・。これが紛争につながるんですよね。なんか分かったような気がします。

さて、今回はこんな感じですかね。次回がありましたら是非お読み下さい。それでは、また・・・。

新しい町、仲間（前書き）

今回は非常にｇｄｇｄです。それでも良いと言う方はお読み下さい。それが嫌だ、という方は戻ることを推奨します。・・・引き返すなら、今しかないよ・・・？

新しい町、仲間

マサラタウンを出て1時間後。俺たちは今、1番道路を彷徨っている。本当は早くトキワシティに行きたいのだが、困ったことに、迷ってしまったらしい。

「おっかしいな、こっちで合ってるはずなんだけど・・・・。」

「ますたー、この道さっきも通りましたよ？」

「え、うそ？」

「だって、あそこの花とか同じですもん。」

そう言えば、あの花見たことがあるかもなぁ。どうも俺、方向音痴らしい。ここはフシギダネに任せたほうが良いだろうな。

「分かりました、頑張ってみます！」

フシギダネはそう言うと、胸をドンと叩いた。・・・力が強すぎたらしいな、痛がってる。

「だ、大丈夫か・・・？」

「はい・・・、しゅいましぇん・・・・・・・。」

これは、どうも後が心配だ・・・。

フシギダネに道案内を任せてから数十分後、・・・・・・俺たちはまだ1番道路にいた。フシギダネはさっきから、おかしいな、おかしいな・・・。と呪文のように繰り返していた。

「なぁ、フシギダネ。あんまりこういうこと言いたくないんだけど、・・・・・・・・・もしかして方向音痴？」

「ま、ますたーだってそうじゃないですかぁ！！」

・・・ああ、そうか。前言っていた「どこか似ているのかもしれない」っていうのは、このことだったんだな・・・。

「と、とにかくあれだ。今のところまだ野生の萌えもんには会ってないし、それだけはラッキーなんじゃないかな？」

「そんなこと言ってると、いきなり現れてくるんじゃないですか？」
フシギダネはどうも、俺が方向音痴と言ったせいで機嫌を悪くしたようだった。俺はフシギダネを抱き上げると、頭を優しくなでてあげた。
「な、なんですか・・・？」
「お前が機嫌悪いのは俺のせいだろ？これは、せめてもの罪滅ぼしと思ってくれ。悪かったな。」
フシギダネは顔を赤くすると、ぼそぼそと「ありがとうございます・・・。」と言った。・・・ああもう可愛いな！食べちゃいたいくらいだぜ！！・・・食べはしないが。
「・・・と、そんなことを言いながら進んでたら、いつの間にかトキワシティに着いてたみたいだな・・・。」
「え？ここがそうなんですか？」
「ああ。あそこの看板に書いてある。」
「看板？・・・・・・・・・あ、ほんとだ。」
看板は町の外の柵に立っていた。・・・この柵、1番道路とトキワシティの境目が分かりやすいように仕切りをつけているのかな。・・・それにしても、・・・やけに長い柵だな。
「トキワシティってこんなに広かったっけ？」
「来たこと無いんで知らないです・・・。」
「まぁそれはお互い様だけどな。・・・で、もうそろそろ降ろしていいか？俺の腕はもう臨界点突破しそうだ・・・。」
「あ、すいません・・・！」
フシギダネは慌てて俺の腕から飛び降りた。・・・よくこんなことできるな。俺だったら、脚の負担を考えて飛び降りだけはしないが・・・。案の定、フシギダネの脚には相当の負担がかかったようだった。地面についてすぐ足をさすっている。
「大丈夫か・・・？」
「は、はい。大丈夫で・・・、痛っ・・・。」
「いきなり飛び降りるからそうなるんだよ。俺が降ろしてやったの

に・・・。」
「すいません・・・。」
俺は軽く微笑むと、再びフシギダネを抱き上げた。
「その足じゃ歩けないだろ。萌えもんセンターまで連れてってやるよ。」
「で、でも・・・、ますたー、腕がきついんじゃ・・・。」
「なぁに、お前のためならこれくらい、どうってことないさ。」
フシギダネはまた顔を赤くし、嬉しそうに笑った。・・・俺、もうそろそろやばいかも。いろんな意味で、いろんなところが・・・。

「それでは、萌えもんをお預かりいたします。」
俺はあらかじめボールに入れておいたフシギダネを、萌えもんセンターの人に渡した。萌えもんセンターの人は治療が完了しました、と言い、ボールを俺に返してくれた。・・・さっきボールを渡したと思っていたが、一分も経たないうちに帰ってきたな。これが萌えもんセンターの売りなのだろう。それはともかく、俺は窮屈なボールからフシギダネを出したやることにした。
「出て来い、フシギダネ!」
「ん、ふわぁあぁぁぁ、やっと出れたぁ・・・。」
フシギダネはん～、と背伸びをすると、笑顔で俺に駆け寄り、抱き付いてきた。
「ど、どうした、フシギダネ・・・?」
「なんか、ますたーの傍にいたくって。・・・・・・迷惑ですか?」
「い、いや、決してそんなことはないよ。じ、じゃあ、行こうか・・・。」
フシギダネは俺の挙動不審な行動に首を傾げた。・・・あのね君、こんな可愛い子にこんなことされてみ?男だったら　くらぁ、ってきちゃうでしょ?ましてやそれが自b・・・・・・。

「さて、次はどこに行こうかな・・・。」
「確か、何か買わないといけなかったんですよね？」
「あ、そうだった。じゃ、そこのフレンドリィショップに行こうか。」
「はい。」
ということで、俺たちはフレンドリィショップに行くことにした。
フレンドリィショップとは、冒険に必要なものなら大体揃っている、俺たちトレーナーにとっては重要な場所だ。ここ無くして、殿堂入りは難しいだろう。俺たちは、早速フレンドリィショップの中へ入った。すると、俺たちに気付いた店員が話しかけてきた。
「フレンドリィショップにようこそ！君、マサラタウン出身の人かな？」
「え、ええ。一応・・・。」
「そうか！ちょっと頼みたいことがあるんだけど、いいかな？」
「頼みたいこと？」
店員は店の奥へ行くと、何かの箱を持ってきた。その箱の中からは、何かがぶつかり合う音が聞こえてくる。
「これを、オーキド博士のところへ届けてきて欲しいんだ。じゃ、よろしく！」
「え、ちょっと待ってください！何か売っていただけないですか？」
「オーキド博士にそれを届けたらね！よろしく～。」
駄目だ。この店員、オーキド博士にこれを届けるまで何も売らない気らしいな・・・。
「ますたー、どうするんですか？」
「・・・・・・・・・・・・しょうがない。オーキド博士のところまで戻るか！」
そして俺たちは、フレンドリィショップを後にした。

時間は進んで3時間後。俺たちは再びマサラタウンに戻ってきた。今、オーキド博士の研究所に向かっている。
「それにしても、おかしな話だよな。行く時と言い帰る時と言い、1人も野生の萌えもんに会わないなんて。コラッタ辺りなら現れてもおかしくないのに・・・。」
「警戒してるんでしょうか？」
「かもなぁ。でも聞くところによると、ポケモンって言うモンスターがすんでいる世界の1番道路じゃ、コラッタ・ポッポは普通に現れるらしいけど。やっぱりこっちとは知能とか本能とかがずれてるのかな？」
「かもしれませんね。・・・あ、研究所ですよ！」
気付けば、懐かしの研究所が目の前にあった。・・・そこまで前の話ではないのだが。
「じゃ、さっさと事を片付けるかな。」
俺たちは研究所に入ると、すぐさまオーキド博士の研究室へ向かった。しかし、その博士の研究室には鍵が掛かっていた。
「ありゃりゃ。こりゃどうしたものかね・・・。」
「助手の人に聞いてみてはどうですか？」
「それもそうだね。じゃあ・・・・・・、あ、お忙しいところすいません。」
俺は近くを通りかかった助手の人に声をかけた。その人は足を止めると、どうしたのかと聞いてきた。
「オーキド博士はどこにいらっしゃいますか？」
「博士？博士なら、研究所のどこかにいるはずだよ。なんか、ゼニガメがどうとかって言ってたなぁ・・・。」
「ゼニガメ？」
ゼニガメというのは、恐らくあのときのゼニガメのことだろう。俺は助手さんに礼を言うと、早速博士を探し始めた。
「ますたー、ゼニガメがどうしたんでしょうか？」
「さあ・・・。とにかく、博士を見つけよう。そうすればゼニガメ

の事も分かるさ。」
フシギダネが頷いたちょうどその時、目の前にあった扉が開き、中からオーキド博士が出てきた。博士は俺たちに気付くと、少し驚いた顔をした。
「おや、憲明じゃないか。どうしたんじゃ？」
「博士ナイスタイミングです。実は、フレンドリィショップ　トキワシティ店の店員さんからおつかいを頼まれまして。これです、どうぞ。」
「おぉ、これはすまんかったの。さて、受け取るとしよう。」
「ところで博士。この・・・。」
「じいちゃん、やっと見つけた！」
・・・こっちはバッドタイミングか。同じ血縁者とは思えん。広志は俺たちがいることに気付くと、あの時の勝負を忘れたかのような態度で接してきた。
「あれ、憲明じゃん！お前も博士に呼ばれたのか？」
「いや、違う。そう言えば、お前ヒトカゲは？」
「ああ、今ボールの中ですやすや眠ってるよ。こいつどうも、某萌えもんに引けを取らないくらい眠るみたいだ。」
某萌えもん・・・。カビゴンだと行きすぎだと思うから、ケーシィ辺りかな？あいつ確か、1日に18時間くらい眠る、って聞いたことがあるぞ。・・・でも、ケーシィの場合は眠りながらでも応戦できるから良いのであって、ヒトカゲはちょっとどうかと思うが・・・。
「それで、じいちゃん俺に何の用？」
「うむ。2人とも、こっちに来てくれ。」
広志はそう言うと、俺たちを先ほど博士達が出てきた部屋へと入れた。部屋の中は、なんと言えば良いのか・・・。・・・とにかく、見たことも無い機械ばかりですごかった。
「実は、お前達に渡すのを忘れていての・・・。・・・これと、これじゃ。」

「これは・・・、もんすたぁぼーる？」
「いかにも。これをそれぞれ５個ずつやろう。あるかどうか確認してくれ。」
あるも何も、一目で５個って分かるがなぁ・・・。しかし広志は、律儀にも１つ１つ数えていた。・・・あ、そう言えばこいつ、物を数えるのが極端に苦手だったっけ？
「ちゃんとあるぜ、じいちゃん。」
「うむ。ではもう１つの方じゃが、それは「萌えもん図鑑」と言うものじゃ。これは、萌えもん１人を捕まえるごとにその萌えもんに関するページが付加される、とても画期的なものじゃ。・・・実を言うと、ワシの長年の夢が全萌えもんについて知ることでのぅ。しかし悲しいことに、現役を引退している今、それを自分の手で叶えることはできん。そこで、お前達に任そうと思い、その萌えもん図鑑を渡したわけじゃ！」
「なるほど！おっしゃ、任せとけじいちゃん！！」
広志は胸をドンと叩き、えっへんと威張った。・・・まぁオーキド博士の言いたいことは分かったが、１つ疑問に思うことがあるんだよなぁ。
「博士。この図鑑の機能はよく分かったんですが、なんかおかしくないですか？だって、ページを増やすにはその萌えもんの情報が必要なわけで、さっきの話だと博士は全萌えもんの情報がさほど無いわけですよね？だとしたら例え萌えもんを捕まえても、情報が図鑑内に入っていないからページが増えるはず無いと思うんですが？」
博士は口をもごもごし、返答に困っているようだった。
「そ、それはあれじゃよ。その図鑑はネットワークで繋がっていて、各萌えもんを調べている研究者の人たちから情報を貰っているんじゃ・・・。」
「そんなことなら博士が自分で調べれば良かったんじゃないですか？俺たちに任せることも無いでしょう。」
「だ、だって、どんな萌えもんがいるか、とか知らんし・・・。」

「ググれ。」
博士はガクッとひざまずくと、おいおいと泣き出した。・・・ジジィが泣いても萌えねぇよ。
「ま、ますたー。ちょっと言い過ぎなんじゃないですか・・・？」
「いいんだフシギダネ。この人に何を言おうと、次の瞬間には忘れているよ。」
「で、でも・・・。」
その時、博士は急に泣くのをやめ、不思議そうな顔をした。
「・・・わしは何で泣いていたんじゃ？」
オーキド博士は恥ずかしさを大声で笑い、誤魔化していた。
「ますたーの言うとおりですね・・・。」
「だろ？でもやっぱ、いじめるのはいけないよな。自重しよう、そろそろ。」

その後、俺たちは雑談をしながら過ごしていたが、広志はやりたいことがある、と思い出したように言い研究所を後にした。
「さて。じゃ俺たちもそろそろ・・・。・・・あ、そうだ。博士、フシギダネが聞きたいことがあるそうですよ。」
「ん？なんじゃ？」
フシギダネはなぜか言いにくそうな顔をしたが、思い切って口を開いた。
「あの、ゼニガメの事なんですけど・・・。ゼニガメ、どうかしたんですか？」
「どうかした、と言うと？」
「さっき助手の人からゼニガメの話を聞いたんですよ。それでフシギダネ、気になっていたんです。」
オーキド博士は納得したような顔をし、俺たちに事情を説明してくれた。
「実はの、ゼニガメがちょっと体調を崩してしまってな。それで、

わしが看病していたわけじゃ。今はこのボールの中で休んでいるよ。」
博士はそう言いながら、ポケットからボールを取り出した。しかし、そのボールは普通のボールとは少し違うものだった。
「このボール、色が違いますね・・・。しかも、なんかマークがついてる。」
「これは一般家庭用に作られた、治療用のボールじゃ。これを使えば、例え萌えもんセンターが近くになくてもある程度の治療をすることができる。」
「それで分かりやすいように、色分けして、十字架のマークがついているんですね。」
「うむ。・・・これは自慢じゃが、実はこれを作ったのはわしなんじゃよ。まだ市場には出ていないがの。いずれは商品化して、それで金儲けしようか、と考えておる！」
オーキド博士はワッハッハッハ、とけたたましく笑った。・・・このジジィは、何気に腹黒いなぁ・・・。
「それで、憲明。ちょっと頼みがあるんじゃが。」
「え、なんですか？おつかいだったらお断りですが・・・。」
「違う違う！実は、このゼニガメお前と一緒に行きたい、と言っているんじゃよ。じゃから、この子も連れて行ってはくれぬかの？」
俺はまさかの言葉に、しばし固まってしまった。やがて脳が理解すると、俺はどうしたものか考えた。・・・いや、別に俺は一向に構わないのだが、問題が・・・。
「それだと、広志に不公平なんじゃないですか？いくらこの俺でも、流石にそういうことはどうかと思うんですが・・・。」
「それなら心配要らない。広志にはすでにもう1人渡しておる。」
「え、そうなんですか？ちなみに、それは・・・？」
「ロコンという萌えもんじゃ。・・・知っておるか？」
残念ながら、俺はロコンと言う萌えもんは知らなかった。・・・これはあくまで推測だが、そのロコン、ここら辺じゃ手に入らないん

じゃないか？少なくとも、マサラタウンでは聞いたことが無い。
「とにかくそういうことじゃ。で、どうする？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・分かりました。そういうことなら、そのゼニガメ連れて行きますよ。・・・フシギダネもそれでいいよな？」
「はい、もちろんです！」
フシギダネはとても嬉しそうだった。まぁ、それもそうだろう。何せ、仲のいい友達と一緒に冒険できるんだもんな。俺だって、もしそういう奴がいたらとても嬉しいと思う。・・・残念だが、俺の身の回りにはいないんだよな・・・。
俺は博士から治療用ボールを受け取ると、早速ゼニガメを中から出すことにした。
「出て来い、ゼニガメ！」
「・・・わーっ！出れたーー！！」
ゼニガメは、元気良くボールから出てきた。それはいい意味で、フシギダネとは対照的だ。
「ゼニガメ、大丈夫？」
「うん、大丈夫だよ！それより、フシギダネと一緒に冒険できることになって嬉しいよ！」
「私も！」
2人はキャッキャとはしゃいでいた。その光景は、とても微笑ましいものだ。俺はその光景をずっと見ていたかったが・・・、流石にそれじゃいけないよな。
「2人とも、そろそろ行くぞ？博士も今から忙しいんだからな。」
「そうですね。じゃあ、失礼しましょうか。」
「博士、またねー！」
「うむ！頑張ってくるんじゃぞーー！！」
そして、俺たちは冒険を再開した。

続く・・・といいな。

新しい町、仲間（後書き）

お読み下さりありがとうございました。いつもよりひどい文章でお送りしましたが、いかがでしたでしょうか。
さて、今回新たに仲間に加わった「ゼニガメ」。本来は加わることないですよね。でも今回仲間に入れたのは、ちょっと個人的にゼニガメだけ置いてけぼりって言うのはかわいそうだと思ったからです。だってそう思いませんか？ゲーム中に研究所に行ったら１つテーブルの上にぽつんと置かれたままになってるんですよ？博士も何を考えてるんでしょうね、あんなに可愛い子を放置しておくなんて。これはもう虐待ですよ虐待！
これ以上言うと収まりがつかないんで自重します。それでは、また・・・。

フラグ追加、そして・・・。（前書き）

この小説はいつにもましてgdgdです。間が空いてしまったのもありますが、最近調子が悪かった、という言い訳だけは聞いて、注意してお読み下さい。

さぁ、それが嫌ならすぐさま戻るだ！

フラグ追加、そして・・・。

研究所を出てから今現在、俺たちは3人は俺の家にいる。再び旅に出る前に、少し休憩しておこうと思ったからだ。・・・と言っても、すでに研究所で十分休憩しているのだが。そこを突っ込んだら負けだZE☆

「しっかし、お前達仲良いよなぁ。ずっと話してるし。」

「そうですか？でも、気が合うのは確かですね。」

「そうそう！私達何かと同じものに興味を持つんだよねー！」

へぇ・・・。言われてみれば、これまで2人の話が噛み合わなかったことは1回も無かったような気がする。・・・しかし、よくもまぁそんなに話題があるもんだ。

「じゃあゼニガメが俺と一緒に行きたい、って言ったのも、2人が以心伝心してたからなのか？」

「う～ん、さすがにそれはないと思います。だって、ゼニガメはますたーと1回も会ったことがないですし・・・。」

「そうだね。私が一緒に行きたいなー、って思ったのは博士から話を聞いてからだし。」

「博士から？どんな話を聞かされたんだ？」

ゼニガメは、博士から聞かされた話をそっくりそのまま教えてくれた。

「・・・それでのぅ、広志がフシギダネを馬鹿にしたんじゃよ。」

「フシギダネを！？フシギダネ、その人に何にもしてないんでしょ！！？」

「うむ。恐らく憲明を挑発したかったんじゃろうな・・・。」

ゼニガメは、怒りをあらわにしていた。自分の親友を馬鹿にされたのが許せなかったのだ。

「それで、その憲明って人はどうしたの？怒ってた？」
「そりゃもちろん。「フシギダネには何の罪もないだろー！」っての。それから、萌えもんバトルが始まった。」
「それでどうなったの？どっちが勝ったの？」
「憲明が勝ったよ。フシギダネの体当たりで一発ＫＯじゃ！」
ゼニガメはそれを聞くと、ほっと胸をなでおろした。
「それから憲明がフシギダネに謝るよう言ったんじゃが・・・、広志は謝らずに行ってしまった。」
「え、なにそれ！？その広志って人、なに考えてるの！！？　信じられない・・・。」
オーキドはハハハと笑うと、視線が合うようにしゃがんでゼニガメにこう言った。
「どうか、広志を許してやってくれ。確かに、あいつには嫌なところもある。じゃが、全部が全部そうというわけではない。・・・人間というのはそういう、複雑な生き物じゃ。じゃから、頼む。許してくれ。」
ゼニガメはオーキドのこんなにも真剣な顔を、初めて見た。普段はおちゃらけていて掴み所のない人なのに、こういう顔もできたんだ・・・。ゼニガメは大きく頷き、広志を許すこと示した。・・・オーキドのこんなにも真剣な頼みを断るなんてこと、できるはずがない。
「ありがとう。わしもこれで一安心じゃ。」
「・・・ねぇねぇ、その憲明って人は、広志とどんな関係なの？」
オーキドは突然憲明の名を出され、少々面食らってしまった。何故憲明の名が出てくるのか、理解できなかった。
「フシギダネのますたーだし、知っておいたほうが良いかな、って思ってさ。それと、広志となんかありそうな感じだったし・・・。」
「なるほど。そういうことなら、教えて悪いことはないじゃろう。」
そしてオーキドは、憲明の話を詳しく聞かせた・・・。

「それで俺と一緒に行きたい、って思ったのか。」
ゼニガメは笑顔で、うん、と頷いた。・・・ちょっと意外な話だったな。オーキド博士がそんな話をするなんて・・・。っていうか、勝手に何を話してるんだ。いや、別に構わないんだが、せめて何か1つ断りとか欲しかったぞ。
「ま、いっか。よし、それじゃあそろそろ出かけるか！」
「はい！」
「うん！・・・で、どこに行くの？」
・・・そっか。ゼニガメはこれからの事、とか知らないんだったっけか。俺は取り敢えず、ゼニガメにこれからの予定などを大まかに伝えた。
「ふむふむ。じゃあこれからニビシティに行って、最初のバッチを手に入れに行くんだね？」
「そういうこと。聞く所によると、ニビのジムリーダー・タケシは地面タイプの萌えもんを出してくるんだそうだ。地面タイプの弱点は「草」と「水」。2人がいれば、たぶん楽勝だろう。」
フシギダネとゼニガメは、嬉しそうな顔をした。恐らく、早速活躍できそうだからだろう。・・・しかし、いくら弱点をつける2人がいるからとて油断はできない。何せ、ジムリーダーに挑むんだから。今の俺たちよりも更に強い奴を出してくるに違いない。じゃあ、タケシに挑む前に仲間を増やさないとな・・・。
「・・・2人とも。タケシに挑む前にまずは仲間を増やそうと思うんだが、いいか？」
「え？なんでですか？」
「いや、流石に2人だけっていうのはちょっとどうかと思ってな。負担が大きくなるだろう？」
「大丈夫だよ！タケシなんて、この私がギッタンギッタンにしてやるんだから！」
ゼニガメはそう言いながらシュッシュッとジャブをした。・・・いや、ジャブでどうにかできると思わないんだが・・・。

「とにかく、何かタケシの弱点をつけそうな奴を捕まえるぞ！・・・・2人にも新しい友達が増えそうだしな。」
「と、友達ですか！？つ、捕まえましょう、早く！！」
フシギダネは俺が静止するのも構わず、ものすごい音を立てながら家を飛び出していった。
「・・・あいつ、どうしたんだ・・・？」
「さぁ・・・、私分かんない・・・。」
俺たちはただ、呆然と立ち尽くしていた・・・。

俺たちはフシギダネを捕獲すると、早速1番道路で仲間探しを始めた。
「さて、野生の萌えもんは現れないかな～？」
「出て来てくれるでしょうか。私達が移動するときは1人も出てきてくれませんでしたし・・・。」
「え、そうなの？それじゃあ仲間を増やすって言うのはきついんじゃない？」
確かにそうなんだよな・・・。マサラタウンとトキワシティを往復した時に全く出てこなかったんだから、捕まえるのは困難だろう。俺がどうやって仲間を増やすか考えていたその時、ふと何かに躓いてしまった。
「ますたー、大丈夫ですか・・・？」
「な、なんとか・・・。しかし、一体何に躓いたんだ？」
「ますたー、これ、生きてるよ？」
俺がつまずいたのはなんと、野生のポッポだった。どうもこのポッポ、目を回しながら気絶しているようだ。・・・ハッ、もしかして、俺のせい！！？
「ま、まずい！早く萌えもんセンターに連れて行かないと！！」
「でもますたー、仲間を増やすんじゃないんですか？」
「その前にこの子を助けないと！下手したら死んじゃうかもしれな

い！！」
この時ゼニガメが何か言っていたが、俺の耳には届いていなかった。俺の頭はとにかくこの子を助けないと、という思いでいっぱいだったのだ。
「ますたー、ま、待ってください！」
「速すぎるよ～！もっとペース落としてよぉ～～！！」
「うがぁあ！！2人とも、ボールの中に入れ！！」
俺は2人をボールの中に入れ、萌えもんセンターへ急いだ。

「ど、どうしました？」
ジョーイさんはものすごい形相で入ってきた俺の顔に驚いていた。って、今はそんなことどうでもいい！早くこのポッポを助けなければ！！
「ジョーイさん！このポッポ、どうも怪我してるみたいなんです！早く治してやって下さい！！」
「わ、分かりました。それでは、萌えもんをお預かりいたしますので、ボールに入れてください。」
・・・そうだった、萌えもんセンターで治療するには、ボールに入れてからじゃないと回復に時間がかかるんだった。でも、だからと言ってこれでボールに入れてしまっては、このポッポをゲットしてしまうことになる。本人の了承無しでゲットしてしまうのはなんだか可哀そうだ・・・。俺がそんなことを考えていると、いつボールから出たのか、フシギダネが俺の袖を引っ張っていた。
「ますたー。今は一旦ボールの中に入れておいて、目が覚めたら逃がす、って言うのはどうですか？」
「そ、そうか、その手があったな！サンキューフシギダネ！！そうと決まれば、行けっ、もんすたぁボール！！！！」
俺はポッポに向かって、博士から貰ったボールを投げた。ボールはポッポを入れると、2，3回動き、やがてカチッ、とポッポを捕ま

えたことを示した。
「よし！ジョーイさん、お願いします！！」
「はい。それでは、萌えもんの治療を行います。」
ジョーイさんはあの、俺が以前フシギダネの治療のために使ったのと同じ台にボールを乗せ、ポッポを治療してくれた。
「萌えもんの治療が完了致しました。またのご利用をお待ちしております。」
「ありがとうございました！よし、出て来い、ポッポ！！」
もんすたぁボールから出て来たポッポは、フシギダネがそうするように、くぁあぁぁ、と可愛らしい欠伸をした。
「むにゃ・・・。・・・あれ、ここどこ？」
「ここは萌えもんセンターだよ。気分はどうだい？」
ポッポは俺に気付くと、なぜか顔を真っ赤にしてそっぽを向いてしまった。・・・？何がどうしたというんだろう・・・。
「あ、あの、助けていただいて、その、ありがとうございます・・・。」
「いや、別にいいよ、お礼なんて。それより、本当に大丈夫？」
「は、はい。おかげさまで・・・。・・・ぁぅ。」
・・・「ぁぅ」？聞き慣れない言葉だが、まぁそれはいいとしよう。それより・・・。
「俺、ポッポに謝らないといけないよな。」
「ぅ？謝るって、何をですか・・・？」
「お前に怪我させちゃっただろ？そのことさ。本当に、悪かったな。」
ポッポは何故謝られているのか、全く分からないというような顔をしていた。まぁ、分からないのも無理はないだろう。だって、昼寝しているところに俺が来て、それで怪我させてしまったんだからな。
「昼寝？いや、違いますよ。私昼寝なんてしてなかったです。」
「え？でも、俺がお前に躓いたせいで怪我を・・・。」
「私、ますたーと会う前から気絶してましたよ？」

・・・・・・・・・・・・え？俺はしばらく、ポッポの言ったことが理解できなかった。・・・ちょっと待ってくれ、まず順番に整理していきたい。まず、ポッポは俺が躓いたから気絶したわけじゃなくて、俺が躓く前にすでに気絶していた、ということか？それで、その気絶しているところを俺たちが偶然通りかかり、俺が躓いた。そしてそこにポッポがいたから、俺はてっきりポッポに躓いて怪我をさせてしまった、と思ったわけだ。それから、萌えもんセンターへ急いで駆け込んで治療してもらい、現在に至る。それでもって本人に謝ってみれば、すでに気絶していたという・・・。・・・じゃあ、一体誰がポッポを気絶させたんだ？

「萌えもんトレーナーの人に倒されたんです。」

「トレーナー？それってどういう人だった？」

「ぁぅ・・・。確か、ヒトカゲを連れてました。そのヒトカゲからは「ヒロシ」って呼ばれてたと思います。」

「ヒロシ・・・？まさか、あいつか！？」

この近辺でヒロシという名前の人間は1人しかいない。そう、俺のライバルを自称している、広志だけだ。まさか、あいつが・・・。その時、誰かがドン！と何かを叩く音が聞こえてきた。誰かと思い振り返ってみれば、それはゼニガメだった。

「広志、なんてことを・・・！この子には何の罪もないのに！！」

「ゼニガメ、仕方ないことだよ。私達は誰かを倒さないと、強くなれないんだもん。」

「でも・・・！」

「フシギダネの言う通りだ。萌えもんはトレーナーの下についてしまったら、闘わないといけない運命なんだ。これは、どうしようもないことさ。」

ゼニガメは腑に落ちない様子だったが、今はこれで我慢することを選んだようで、ぶすっとしながら俺の手を握った。・・・実を言うと、こいつポッポに会うまでずっとこうやって俺の手を握っていたのだ。何のためか知らないが。

「それじゃあ、ポッポ。お前もう行っていいぞ。野生に戻るんだ。」
ポッポはキョトンとした顔をした。何を言われたのか、理解できていないようらしい。
「ぁぅ、私、ますたーにゲトされたんじゃないんですか？」
「ん、それはまぁそうだが、お前も俺に付いていくのは嫌だろう？」
「そんなこと無いです！私、あなたとならどこへでも行けます！ですから、連れて行ってください！！」
ポッポは少し涙目で、それでも必死に、俺に連れて行ってくれ、と言った。・・・そこまで言われると、俺も断れないよな・・・。
「・・・・・・よし分かった。これから、ポッポも俺たちの仲間だ！」
「やったぁ！」
「よろしくね、ポッポちゃん！」
「よろしく！」
「うん、よろしく！！」
3人は、互いに新しい友達が増えたことを喜んでいた。俺は、その光景を眺めながら、あることを考えていた。

ニックネーム、何にしようかな・・・。

フラグ追加、そして・・・。（後書き）

本日はお読み下さり、誠にありがとうございました。いやぁ、なんだかすっごい久しぶりなような気がしますよ（＾＾；　いや、本当にそうなんですがね。

それはともかくとして、お話したいことが。いつもの事ですね、まぁいいや。それで、言いたいことっていうのは、この小説に対するご評価のことです。まさか、評価していただけるとは思いもしておりませんでした。評価してくださったお2方、誠にありがとうございました。つたない文章で所々分からないところがあるかもしれませんが、今後もお読み下されれば幸いです。

それでは、今日はこの辺で。さぁ、飯が私を待ってるぞー！

P．S．

大変申し訳ありませんが、ポッポのニックネームを募集します。他の2人がすでにニックネームが決まっているかと言うとそうでもないのですが、取り敢えずポッポのニックネームを、何かいい案があればお送り下さい。決定基準はあくまで私の好みとなりますので、そこの所はご了承下さい。

いざ、ニビジムへ（前書き）

大変お待たせいたしました、第5話です。やっとできた・・・。
これまた日を置いて置いての作業でしたので、一部お見苦しいところもあるかもですが、そこはご愛嬌ということで。
それでは、本編へどぞ～。

いざ、ニビジムへ

ポッポを仲間に新しく加えた俺たちは、トキワシティの近くにある草むらで修行をしていた。
「おっしゃー！みんな結構Ｌｖ上がったな！！」
「はい！なんだか強くなれたような気がします！」
「う～、なんか戦い足りないよー！もっと強い奴いないかなぁ！！」
「ぁぅ、戦いすぎはいけないですぅ・・・。」
興奮するゼニガメを制するポッポ・・・。見たこと無い光景だ。これはこれで面白いな、うん。
「っと、ずっと夢中になって修行してて気付かなかったけど、この草むら、どっかの道に繋がってるみたいだな。」
「どこでしょうか？」
「さぁてな。いっちょ行ってみるか！」
俺がそう言うと、３人は元気よく頷いた。うむ、みんな素直で可愛いな！食べちゃいたいくらいだ！
ロリコンみたいな冗談はさておき。俺たちは草むらから出て、その道に出てみた。すると、見覚えのある顔が、こちらに向かって気持ちの悪い笑顔で駆けて来ていた。
「広志！こんなところで何やってるんだよ？」
「何ってお前、萌えもんリーグに挑戦しようと思って、チャンピオンロードに行こうとしてたんだよ。でもさ、警備員のおっちゃんが「お前はバッチを１つも持ってないから駄目！」って言ってさー。どうも、バッチを８つ集めないと萌えもんリーグに挑戦することができないらしいんだよ。」
・・・こいつはそんなことも知らなかったのだろうか？こんな物、一般常識だと思ってたんだが。どうもこいつには、普段耳にする「情報」というものは一切不要なものらしい。・・・だからこんなにも馬鹿なんだ。

「でさ、お前の萌えもんどれくらい強くなったんだよ？俺なんて、仲間が1人増えたんだぜー？」
「へぇ、そいつは奇遇だな。俺の萌えもんも強くなったし、新たに1人増えたんだ。・・・で、それがどうした？」
「はぁ？お前、バトル以外に無いだろ？ということで、お手並み拝見と行こうか！！」
・・・相変わらず、血の気の多い奴だ。もしかして、今後俺と会うたびこんなことを言ってくるのだろうか。できれば傷つけたくないんだがなぁ、こいつのプライド。
　ふと、俺の背後でとてつもない殺気を感じた。言わずとも分かるかもしれないが、その主はゼニガメだった。その殺気に、他の2人はびくびくしているようだ。
「ぜ、ゼニガメ！ちょっと落ち着け！」
「・・・シ・・・、ヒ・・・シ・・・、・・・ロ・・・、・・・。」
駄目だ、俺の声が届いていない。しきりに、広志の名前を繰り返している。・・・これは、早くあの馬鹿から離さなくてはならないな・・・。
「フシギダネ、ポッポ！ゼニガメを落ち着かせるために、広志を早く倒すぞ！」
「は、はい！」
「・・・・・・ぅ・・・。」
「泣くな、ポッポ。大丈夫、あいつが消えれば、ゼニガメも元に戻るから・・・。」
「ぁぅ・・・、は、・・・はい・・・！」
ポッポもようやく覚悟が決まったようだ。俺はポッポの頭を軽くなでると、広志の方へ向き直った。
「もういいか？じゃ、さっさと始めようぜ！」
「ああ。ここはちゃっちゃと終わらして、早く帰らせてもらうぜ！」

「落ち着いたか？ゼニガメ。」
「う・・・、取り敢えず・・・。」
広志を何の苦労も無く打ちのめした俺たちは、すぐトキワシティの萌えもんセンターに行き、広志からゼニガメを離した。萌えもんセンターに入った後も少し興奮気味だったが、それも今は何とか引いたようだ。
「全く、びっくりしたぞ。今度からそのようなことが無いように。・・・いつまでも広志の事を引きずっていると、何にも進展しないからな？」
「・・・分かったよ、なるべく気をつけるようにする・・・。」
ゼニガメは、シュン、となりながらそう言った。俺はゼニガメの頭を優くなでてやると、皆に向かって言った。
「みんなずっと闘って疲れただろ？ということで、広志から巻き上げた金で何か食べに行こうぜ！」
「いいですね！ぜひ行きましょう！」
「私も行きます！ぁぅ！」
「よし！で、ゼニガメも行くよな？」
ゼニガメは急に話を振られ、驚いて顔を上げた。
「どうしたそんな顔して。行くんだろ？」
「も、・・・もちろん！さ、早く行こ！」
ゼニガメは元気よく、俺の手を引いて萌えもんセンターを飛び出した。残りの2人も慌てて着いてき、俺たちは当ても無く食事できるところを探し始めた。
その時、俺は気付かなかった。俺たちの背後で何かがこそこそと動いていることに・・・。

翌日。俺たちは今、ニビシティに向かうべくトキワの森を進行中だ。途中途中現れる野性の萌えもんはいずれも捕まえたことのない娘達ばかりで、図鑑作成にとても貢献してくれた。

「しっかし、右も左も木、木、木、木！木ばっかりで何も見えん！！」
「まぁまぁ。ますたー、落ち着いて・・・。」
「フシギダネは良いよな。草タイプだし、こういう植物ばっかりのところは心が休まるんじゃないのか？」
「そんなことないですよ。それに、私はますたーが傍にいてくれるだけで、その、・・・。」
フシギダネはそこまで言うと、赤くなってそっぽを向いてしまった。
・・・まぁ、フシギダネが言わんとしていることは分かるが、その、やっぱり、・・・なあ？
「ま、ますたー！私も、ますたーが傍にいてくれれば、その・・・、とっても、心が・・・。・・・ぁぅ・・・。」
「無理して言わなくて良いよ、ポッポ。お前達の気持ちは分かったからさ。」
「ぁぅ・・・。」
俺はポッポの頭を軽くなでてやると、フシギダネと一緒に抱っこしてあげた。
「お前らのおかげで、なんかもっと頑張れそうな感じがしてきたぜ。これはそのお礼だと思ってくれ。」
「は、はわわわわ・・・。あ、ありがとうございます・・・。」
「ぁぅ、ぁぅ・・・。」
フフフ、可愛いやつらめ・・・。思わずよだれが出ｔ（ｒｙ
と、そう言えばゼニガメがさっきから空気なような気がするのだが、ゼニガメは・・・。
「どうした、ゼニガメ。ほっぺた膨れてるぞ？もしかして虫歯か？」
「そうそう、昨日食べ過ぎたせいで虫歯に・・・、っておい！！」
おお、なんというノリツッコミ・・・。こいつ、こんなこともできたのか。
「さっきから私1人除け者にするなんて、ひどくない！？」
「いやぁ、そんなこと言われてもなぁ・・・。俺は別に除け者にする気なんて無かったし。」

「うそだぁ、さっきから2人相手にデレデレしてるし。」
「デレデレって・・・。」
はっきり言うと、俺にそんな気は無いのだが・・・。まぁここまでの流れを見てると、まるでどっかのギャルゲみたいな感じではあるがな。
　だけど俺、ちょっと前に結構ゼニガメと絡んでたし、これはこれで平等なのではないだろうか？そうでもないかなぁ・・・。
「とにかく、今のところは辛抱してくれ。次の町に着いたら構ってやるから。」
「べ、別に、構って欲しいわけでもないよ！」
・・・今思ったが、もしかしてこいつってツンデレ？また新たな属性が・・・。もしかして、捕まえる度にこんな属性が増えていくのだろうか？じゃあ、ここで捕まえた娘達も、何らかの属性が・・・？
　そんなことを考えていた、ちょうどその時。俺たちの背後で、何かがガサガサと動く音が聞こえてきた。それに驚き俺たちは一斉に振り返ったが、・・・そこには誰もいなかった。
「なんだったんだ、今の・・・？」
「も、もしかして、幽霊でしょうか・・・？」
「いや、それは無いと思う。ってか、無いと信じたい。そんなことがあるのはシオンタウンだけで十分だ。」
「シオンタウン・・・？」
ああ、そっか。こいつらはシオンタウンについて知らないんだな。
　説明せずとも分かると思うが、シオンタウンは「萌えもんタワー」という、萌えもんたちの墓がある場所だ。墓と言うだけあって、シオンタウンには幽霊が頻繁に現れるらしい。
　なんて言うのか、動物の幽霊じゃないから怖いよな・・・。動物の幽霊ならまだそこまで怖いという感じもしないと思うが、・・・萌えもんだしなぁ。思いっ切り人間の姿をしてるし、遭遇したら怖いだろうなぁ・・・。
「って、そんなことを考えてたらもう出口だぜ。」

どうも、いつの間にやらトキワの森の出口に着いていたらしい。考えてみれば、脱出するのにさほど時間を食っていないような気がする。
「よし。早速出ようか。」
「そうですね、そうしましょう。」
「なんか、ここに来るまでにすごい疲れたような気がするんだけど・・・。」
「ぁぅ、タイプのせいでしょうか・・・？」
そう言えば、ゼニガメは水タイプだったな。もしかして、ここの草に水吸い取られたか・・・？
「そんな馬鹿な、いくらなんでもそんなことは・・・。・・・・って、ゼニガメ。その後ろのピカチュウはどうしたんだ？」
「え・・・？」
ゼニガメは恐る恐る、後ろを振り返ってみた。そこには、なぜか涙目のピカチュウが立っていた。・・・何気に可愛いぞ、こいつ。
「もしかして、原因はそのピカチュウ？ってか、なぜ涙目？」
「聞いてみましょうか？」
「そうしよう。」
俺は、怖がらせないよう、笑顔でピカチュウと視線が合う体勢をとった。ピカチュウはなおも涙目だ。
「こんにちは。」
「・・・こんにちは。」
ふむ、挨拶は普通にできるようだ。って当たり前か？
まぁいい。それより、本題に移るとしようか。なるべく、怖がらせないように・・・。
「どうして泣いてるの？」
「・・・泣いてないもん。」
「ああ、ごめんごめん。じゃあ、何でそんな顔してるの？」
「・・・そんな顔って？」
「目がちょっとうるうるしてる。」

「・・・・・・。」
無言・・・。俺この際だから言うと、無言攻めって言うのに弱いんだ・・・。
「えっと、何か悲しいことでもあったのかな？」
「・・・うん。」
・・・マジか。
「それは、どんなこと？」
「・・・・・・。」
また無言・・・。いい加減無言攻めはやめてくれないかなぁ。俺泣いちゃう。
「言いたくないことなの？」
「・・・そうでもない。」
「じゃあ言ってみてくれるかな？」
「・・・いや。」
どっちだＹｏ。
「えっと・・・、それじゃあ、質問を変えるね？どうしてゼニガメの後ろにいたの？」
「・・・見かけたから。」
「ゼニガメを？」
「・・・うん。」
むむ、ちょっとどういうことか分からなくなってきたぞ・・・？
　このピカチュウは、何か悲しいことがあったんだ。それで、そこを俺のゼニガメがたまたま通りかかったから付いてきたと。・・・なんで付いてきたんだ？
「君は、このゼニガメを見たことがあるの？」
「・・・（ふるふる）。」
「じゃあ何で付いてきたの？」
「・・・見かけたから。」
いや、それはさっき聞いた。俺が聞いてるのはそんなことではないんだが・・・。

それより、ここでずっとこんなことやってると日が暮れてしまう。俺は一刻も早くニビシティに行って、一個目のバッチを手に入れたいんだが・・・。さて、このピカチュウ、どうしたものかね・・・。
「あ、そう言えば。なぁ、3人とも。俺ピカチュウゲットしてたっけ？」
「ピカチュウ？う～ん、ゲットしてたようなしてなかったような・・・。」
「ぁぅ、どっちつかずです・・・。」
「多分、してなかったと思いますよ？」
ふむ・・・。ならこの場は一旦捕まえといて、後でゆっくり話を聞くとしよう。
「なぁ、ピカチュウ。このボールに入ってみないか？」
「・・・どうして？」
「いや、どうしてと聞かれると困るな・・・。とにかく、ちょっと入るだけだよ。大丈夫、悪いことにはならないから。」
「・・・悪いことって？」
「いや、・・・なんでしょう？」
「ますたー、もう少し考えてから言ってみたらどうですか？」
何気にフシギダネが鋭いことを言う・・・。て言うか、こいつそんなこと言うタイプだったのか？
「と、とにかく、中に入ってくれないかな？」
ピカチュウはしばしどこか宙を見つめ、こくり、と頷いてくれた。
俺は早速ピカチュウをボールに入れると、トキワの森を脱出した。
ちなみに、なんか周りに変なクソガキ共がいたようだが、敢えて無視しておくことにした。関わりあうと変な因縁をつけられそうだ・・・。

時は飛んでＰＭ１：３０。俺たちはニビシティの萌えもんセンター前にいる。なぜ中に入っていないのかというと、大した意味は無

い。
「それじゃあピカチュウ。何で泣いてたのかな？」
「・・・・・・。」
ボールから出し改めて聞いてみたが、ピカチュウはやはり、黙ったままだった。・・・それほど嫌なことがあったのだろうか。
「ますたー。理由を聞くのはまた後日に、ということにしてみては？」
「むむ、それもそうだな。だとすると、このピカチュウ俺にゲットされてしまった、ということになるが、・・・ピカチュウ、それで良いかい？」
「・・・何が？」
聞いてなかったのかよ。って、気付いてみれば、このピカチュウずっとゼニガメの後ろにいるぞ。ああ、ゼニガメの顔色がどんどん悪く・・・。
「って、そんなことを考えてる場合じゃないよな。ゼニガメ、戻れ。」
「あいあいさ～・・・。」
ゼニガメはへなへなと敬礼すると、ボールの中へ戻っていった。このボール一応治療用だから、少しは回復するだろう・・・。・・・あ、萌えもんセンターに行けば良いのか。忘れてた。
「それで、ピカチュウ。どうする？俺に付いてくる？」
「・・・うん。」
話が早くて助かる。俺は3人をボールの中へ戻すと、萌えもんセンターの中へ入っていった。

更に時間は飛び、現在ＰＭ２：１５。今は最初のジム、ニビジムの前に立っている。
「さて。みんな、準備は良いか？」
「良いですけど・・・、今回は何で2人だけなんですか？」

そう、今回はフシギダネ、ゼニガメの2人のみで挑むのだ。理由は簡単、相性的にこちらが有利だからだ！この2人で挑めば、恐らく負けることは無いと思う。よほどのレベル差が無ければ、の話だが。
「まぁレベル差があるとしても、それは多分±5くらいだろう。なに、心配すること無いさ。」
「そうでしょうか・・・。」
「大丈夫だって！私達がいれば、ここのジムリーダーなんか蚊みたいなもんだよ！」
「蚊は言いすぎだと思うぞ・・・。」
「と、・・・とにかく！負けることなんてありえないの！さ、行こ！！」
ゼニガメは元気よく、ジムの中へ入っていった。・・・ピカチュウが離れてからというもの、元気なことこの上ない。よほど嬉しかったんだろうか？
「ま、とにかく。1番最初のジムを黒星スタートって言うのは嫌だし、絶対勝つぞ！」
「は、はい！じゃあ、行きましょう！！」
そして俺たちも、ジムの中へと足を踏み入れた・・・。

続いてしまって良いんだろうか？

いざ、ニビジムへ（後書き）

はい、お疲れ様でした。はっきり言うと、見直しとかしてないんで誤植があったりするかもしれなかったですが、どうでしたか・・・？最初に書いたとおり日を置いての作業だったので、見直す気にもなれませんでした、はい。

それにしても、人間って不思議なもんですね。日によって上手く書けたり書けなかったりと、コロコロ変わります。こういうのは、上手く書ける日に一気に全部終わらしちゃったほうが良いんでしょうか。う～む、それだと、いつになるか分からんぞ？

まぁ、どんなときでも書ける様にならなければそれは一人前じゃないですよね、多分。一刻も早くそうなりたいものです。

それでは、本日はこの辺で。また次話でお会いしましょう～。

ニビジム～おつきみやま（前書き）

今回は日を跨いだとは言え、ちょっと面白くなるように気をつけて作ったつもりです。もしかしたら一部お見苦しいところがあるかもしれませんが、まぁそれも一興という事で。

それでは、お楽しみ下さい。

ニビジム～おつきみやま

「ここがニビジムの内部か・・・。」
ニビジムの中は、必要以上に岩がゴロゴロしていた。もしかしたら、どこかにイシツブテが隠れてるかもしれない。それは無いか。
で、先に入って行ったゼニガメはというと・・・。あいつ、なにやってんだ？
「どうした、ゼニガメ？」
「なんかこのクソガキが変な事言ってくるんだよ～。」
「な、この！誰がクソガキだ！！」
いや、あんた見るからにクソガキです。
ゼニガメに何かあーだこーだ言っていた少年は、ここのジムリーダーの弟子みたいなもんだそうだ。なぜかキャンプボーイの格好をしているが、ま、趣味ということにしておこう。
「それで、うちのゼニガメに何か？」
「こいつ、あんたがいないのにも関わらず俺に勝負を仕掛けてきたんだよ。んでもって俺やられたんだよ！どういうことだよ！？」
「知らないよ！それだけあんたが弱かったってことでしょ！」
「な、この亀・・・！」
少年とゼニガメは、互いに火花をバチバチと鳴らしあった。う～む、ここは俺にはどうしようもないなぁ・・・。
「こういうのはジムリーダーが仲裁に入るべきだと思うんだが、そいつはどこにいるんだ？」
「ますたー、あそこで仁王立ちしてる人じゃないですか？」
フシギダネが指差した先には、１０代後半と思われる男が立っていた。そいつは目を細めて（元からあれか？）、こっちをただ黙って見ているだけだ。・・・なぜあの場から離れてこっちに来ないんだ？
「タケシさんなら、あそこから一歩も動かないぜ。いつもああやって仁王立ちして、精神を高めてるんだ。」

「まぁそうだとしてもだ。ジム内で喧嘩が起きてるんだぞ、仲裁に入るのが普通じゃないのか？」
「タケシさんはそんなことしないよ。いつ挑戦者が現れても良いように、自分以外に起きる出来事には関心を持たないようにしてるんだ。」
まぁ、どんな挑戦者にも対等に勝負できるようそうやってるんだろうが・・・。せめて仲裁くらいはやっても良いよな。
「これは、あいつの目を覚まさせる必要があるかな。」
「それって、どういうことですか？」
「理由については前述した通りだ。ということで、フシギダネ、ゼニガメ。行くぞ！」
「おっしゃー！いっちょかましてやるー！」
「はい、頑張りましょう！」

できれば試合の様子を見せたかったが、時間の都合上割愛させていただく。で、結果はというと・・・。
「なんか、拍子抜けでした・・・。」
「まぁ、相性が相性だったしな。仕方ないさ。」
「あ～、もう！よくあれでジムリーダーやってられるよねぇ！！」
「ぁぅ、勝ったから良かったじゃないですか・・・。」
そう、ポッポの言った通り、俺たちが勝った。でもこれが、なんともつまらない試合だったのだ。
最初のターン、こちらはフシギダネ、向こうはイシツブテを出した。レベル差のおかげでこちらが先攻、つるのムチで一発ＫＯ。
次のターン、こちらはフシギダネを引っ込めてゼニガメ、向こうはイワークを出した。ここもレベル差のおかげでこちらが先攻、みずでっぽうでこれまた一発ＫＯと、なんとも張り合いの無い試合だった。まぁ、一番びっくりしていたのはタケシの方だったのだが。
「ま、バッチももらえて向こうもなんか改心したみたいだし、これ

で良いんじゃないか？」
「そうですね。終わりよければ全てよし、とも言いますし。」
「あぁ、神様。次のジムリーダーこそはもっと張り合いのある奴でいてくれますように・・・。」
「次はハナダシティだったよな？だったらゼニガメの出番無いぞ、水タイプ専門だから。」
ゼニガメはまるで雷に打たれたような顔をし、しばらく固まってしまった。・・・よほどショックだったのだろうか。
「だけどゼニガメ。ポッポとピカチュウを見てみろよ。今回なんて一回も活躍してないんだぞ？」
「うぅ、そうだけど・・・。」
「あんまり、でしゃばり過ぎはいけないと思うよ？」
「ふ、フシギダネ、お前もか・・・。」
お前はガイウス・ユリウス・カエサルか・・・。
　と、お馬鹿なことをやってて忘れてた。ピカチュウだよピカチュウ。何で泣いていたのかを聞かなければ・・・。
「ピカチュウ、ちょっと・・・、って寝てるし。」
ピカチュウはまぶたを真っ赤にしながら、くーくーと可愛らしい寝息を立てていた。・・・寝ているせいか、たまに頬がバチッと電気を出している。危険だなぁ・・・。
「でも・・・、こうやって見てると、なんだか可愛いですよね。」
「そうだなぁ。起きてるときはずっと半泣きで、どう接して良いのやら一生懸命だったからな。・・・って、それ俺だけじゃないか！？」
フシギダネはクスッと笑い、寝ているピカチュウの頭を撫でてあげた。ていうか、電気エネルギー駄々漏れなのによく触れるな・・・。
「あ、そっか。フシギダネは相性的にピカチュウより強いんだっけ。」
「はい、だからなんともありません。・・・あれ？この子、何か持ってますよ。・・・あ、」

フシギダネが取り出したものは、いつだったか俺が読んだ萌えもんの道具本の中に出ていたものだった。それは、ピカチュウに持たせるととくこうが2倍になるという、あれだ。
「でんきだまじゃないか。それ、滅多に手に入るものじゃないぞ？」
「私も初めて見ました・・・。でも、何でこの子が・・・。」
「ちょっと、そこのお2人さん！」
俺が声のほうを振り返ると、ゼニガメとポッポが数m離れたところでびくびくしながら立っていた。
「そのでんきだま、早くしまってくれない！？」
「ぁぅ・・・。私達、死んじゃいます・・・。」
「え、あ、そっか。2人ともでんきタイプに弱いんだっけか。待ってろ、すぐしまうから・・・。」
俺はでんきだまをピカチュウに再び持たせると、ピカチュウをボールへ戻した。・・・でんきだまを持ってるピカチュウの方も危険だしな。
「ふぅ～、やっと落ち着けた・・・。今度からはちゃんと電気のコントロールができるときに出してよね！」
「おいおい、無茶言うなよ。まだ小さいんだし、いつ寝てるか分からないだろ？」
「ぁぅ、それもそうです。もし寝てるようであれば、その時は離れるしかないですね・・・。」
「ゼニガメ、この子が成長するまでの辛抱だから・・・。」
ゼニガメはどうも納得できなかったようで、プーッとむくれてしまった。・・・こういうときの対処法も考えないといけないのだろうか。俺って多忙・・・。
「ま、とにかくだ。明日はおつきみやまを越えてハナダまで行く予定だから、今日のところはしっかり休んでくれ。」
「はい、お休みなさい・・・。」
「お休みなさいです、ぁぅ。」
そう言って、2人はボールの中へ戻っていった。・・・しかし、ゼ

ニガメはずっとむくれたままで、ボールの中へ戻ろうとしなかった。
「ほら、ゼニガメ。お前も寝るぞ？　って、なんだ・・・？」
ゼニガメは頬を膨らませながら、目で何かを訴えているようだ。・・・ちょっと待ってくれよ・・・。・・・あ、なんとなく分かったような気がする。でも、いろいろと大丈夫かなぁ。
　そんなことを考えていても仕方ないか。俺は（なぜか）覚悟を決め、ゼニガメに向かって言った。
「ゼニガメ、一緒に寝ようぜ？ほら、こっち来いよ。」
「！・・・・・・・・・。・・・・うん。」
ゼニガメはゆっくりと、俺のところまで歩いてきた。そして、俺の隣に腰掛けた。
「じゃ、寝るか。」
「・・・うん。」
そして、夜は更けていった。

　翌朝。俺は何かに叩かれ、目を覚ました。・・・って、痛い！なんかかなり痛い！！
「な、なんだなんだ！！？」
目を開けると、そこは地獄だった・・・。
　と言いたくなる様な光景が広がっていた。フシギダネがいつもの優しい笑みではなく、鬼のような形相で馬鹿でかい金槌を持っていて、ポッポはこれまた鬼のような形相でバットを・・・。ってどこから持ってきたそんなもん！！？
「まぁすぅたぁ～、どういうことか説明してもらいましょうか～～・・・？」
「なな、何の話だ！？」
「とぼけないで下さい！なんで、ゼニガメと一緒に寝ているんですか！？しかも抱き合って！！」
・・・気付けば、ゼニガメが俺に抱き付いて、幸せそうに寝ていた。

ぇっと。確か昨日の夜、ゼニガメが一緒に寝たいと目で訴えてきたもんだから、俺はそれに従って一緒に寝てあげた訳だ。でもその時は抱き合ってなかったぞ、俺の記憶に違いが無ければ。ただ一緒に寝てあげただけだ。

・・・つまり。これは、ゼニガメが寝惚けて俺に抱きついたということか？うん、そうだ。そうに違いない。

「だだ、だから、２人とも落ち着いてくれ！多分そういうことだと思うから！！」

「多分～～？確証無いんですかぁ～～～？？」

「いや、ある！だから、その武器を下ろしてくれ！！」

「これは武器じゃないです。愛のムチとでも思ってください。」

「ムチじゃない！絶対ムチじゃないそれ！！思えないから、って、待って！マジで！！後生だからってアッー！！！！！」

その日、俺は初めて三途の川を見たのだった。

フシギダネとポッポにフルボッコされた俺は、どうやら正気に戻ったらしい２人によってなんとか一命を取り留めることができた。２人は先程から、申し訳ないと何度も謝っている。

「ホントにごめんなさい・・・。」

「ごめんなさいです・・・、ぁぅ・・・。」

「いや、いいよ。そりゃ死に掛けたのは２人のせいだけど、その２人のよって何とか生きてるんだから。」

おっと、これは失言だったか？

だが２人は嬉しそうに笑ってくれたので、さほど気にしていないようだった。・・・それよりもだ。

「なんで２人は俺がゼニガメと寝てたくらいで怒ってたんだ？」

俺がそう問うと、２人は顔を真っ赤にして俯いてしまった。・・・

まぁ、なるほどな・・・。

その時、事の発端を作ったゼニガメがもぞもぞと目をこすりなが

ら起きた。・・・こいつ、なんて幸せそうなんだ・・・。
「おはよう、ゼニガメ。よく眠れた？」
「あ、フシギダネ。おはよう～。・・・って、どうしたの、ますたー？」
「もしかしてこの傷かい？まぁ、気にするな。大した事だけど大した事じゃない。」
ゼニガメは不思議そうに首を傾げた。・・・この子、いつの日かお灸を据えないといけないかな。
「ま、とにかく。今日はおつきみやまを越えてハナダシティまで行くぞ。準備は良いか？」
「私は大丈夫です。」
「ぁぅ、大丈夫です。」
「万事ＯＫだよー。」
「よし。・・・ところで、ピカチュウはまだ起きてないのか？」
どうやらみんな、ピカチュウのことを忘れていたらしい。言われてみればと辺りをキョロキョロし始めた。・・・こいつら、薄情だな。
「ますたー、あの子まだ寝てるみたいですよ？」
「む、そうか。できればズバット対策ということで起きててもらいたかったんだが・・・。」
無理に起こすのもあれだし、俺は諦めて、この場は今起きているこのメンバーで進むことにした。

「さぁ、いろいろ素っ飛ばしておつきみやまの入り口前だ。みんな、生きてるかー？」
「ますたー、みんな生きてますよ・・・。」
フシギダネが苦笑しながら突っ込んでくれた。・・・なんて言えば良いのか、せめて苦笑しないで欲しかった。
　まぁとにかく、今言った通り現在おつきみやまの入り口前にいる。ここに来るまでに結構苦労したぞ。

ニビシティを出て待ち構えるトレーナーの数々。一部トキワの森辺りで見かけた虫捕り野郎もいたが、全てフルボッコしてきた。って言うより、何であいつらここにいるんだよ？
「ま、今はそんな怪現象はどうでも良い。一旦そこの萌えもんセンターで休んでから、おつきみやま攻略と行こうか！」
「そうですね。じゃ、行きましょう。」
「ぁぅ、「攻略」ってなんですか？」
「そこを聞くか。・・・まぁ、つまりあれだ。生きてハナダまで行こうってことだ。」
「ますたー、それ言い過ぎだよ。」
「でも意味的にはそういうことじゃないか？」
「ぁぅ、そうなんですか？」
「まぁ、そこまで深く考えることでもないと思います。」
ま、そうだろうな。今はそんなことより、こいつらの体力回復をしないとだ。
で、萌えもんセンターで彼女らを休ませたわけだが。・・・ここでふと疑問。
「お前ら、そろそろ進化しても良い頃合なんじゃないのか？」
「そう言われてみるとそうですね。そろそろ進化しても良いかも・・・。」
「んじゃ、いっちょやっちゃう？」
「ぁぅ、そうしましょうか。」
そう言って3人は、それぞれ進化の準備を始めた。・・・って、ちょっと待て！
「お前ら、自分の好きなときに進化できるのか！？」
「あはは、そんなわけ無いじゃないですか。一定の強さ以上にならないとできませんよ。」
「んなこたぁ分かってる！俺が聞いてるのは、時期が来たら自分で好きなときに進化できるのかってことだ！！」
3人は俺が何を言っているのか分かっていない様子だった。まるで

そんな常識的なことをなぜ聞いているのだろう、とでも言わんばかりだ。・・・おいおい、普通知らないぞ、そんなこと。
「ま、まぁ、そういうことならそれでいいさ。各自好きなようにしてくれ・・・。」
「そうさせて頂きます。それじゃ・・・。・・・んっ・・・。」
「んっ」て・・・。・・・と、とにかく、今起こってることをありのまま話すぜ。
　フシギダネは、なんだか、・・・何て言うのか、なんて言えば良いのか、・・・そう、悶える様にして・・・？喘ぎながら・・・？進化し始めた。漏れる声がなんとも・・・、あれだ。頬は紅潮し、今にも○○○が○○しそうだ。そして、どこが光源なのか、不思議な光がフシギダネの体を包み始めた。その光の間からわずかに滑らかな曲線が見える。やがて光が消える頃には、フシギダネはフシギソウへと進化を遂げていた・・・。
「って、なんだその進化の仕方はーー！！父さんこんな子に育てた覚えは無いぞ！！？」
「そうですか？至って普通ですけど。」
「普通って・・・。ということは、あの2人も同じように進化するのか！？」
フシギダネ・・・、じゃなかった。フシギソウはあっさりと頷いて見せた。・・・ちょっと待ってくれよ、それ、俺の理性吹っ飛ぶ可能性あるぞ・・・？
　そうならないためにも、俺はまだ進化していない残りの2人に提案を持ちかけた。
「な、なぁ、ちょっと提案なんだけどさ。俺一旦席外すから、その時に進化してくれないか？」
「・・・ますたー、ごめん、それ無理っぽい・・・。・・・・・・・・あっ、」
「ぁぅん、ぁぁ・・・。」
「どわー！ちょ、マジでタンマ！！待って、待て、待ってばよーー

ーー！！！！」
そんな俺の悲痛な叫びもむなしく、２人は色っぽい声をあげながら進化を続けた。俺は慌てて萌えもんセンターの外に出、危うく理性が吹っ飛びそうになるのを寸での所で防いだ。
「た、助かった・・・。・・・それにしても、まさか、萌えもんがあんな風に進化するなんて・・・。予想外だぜ。」
そうだ、予想外だ。誰か教えてくれても良かったよな。オーキド博士くらいなら知ってたと思うんだが。
・・・待てよ。もしかして、知ってるのにわざと教えてくれなかったのか？俺が初めて萌えもんの進化を見て悶える様を想像して楽しもうって考えてたとか？おいおい、冗談にもほどがあるぞ。俺の町の大人ってのは、どうしてこうも子供をおちょくりたがるんだ・・・。
俺がそんなことを考えていると、ウィーン、と萌えもんセンターの中から進化を終えた３人と、さっきの騒ぎで起きてしまったのか、若干まだ眠そうなピカチュウが出て来た。
「ますたー、大丈夫ですか？ちょっと顔、赤いですよ？」
「ぁぅぁぅ、まさか、あのダメージがまだ・・・。」
「いや、それに関しては心配御無用だ。それよりも、お前達の進化の仕方に問題がある。」
「私達の？どんな？」
む・・・。それを聞かれると、何て答えれば良いのか返答に困る・・・。流石にまだ教えるわけにもいかないしな。
ここで、今のこいつらの人間年齢はどのくらいなのか、お教えしたほうが良いかもしれないな。では、例を使ってｔｅａｃｈすることにしよう。
俺がどっかの世界で言うところの「高校生」だとするならば、進化前のこいつらは「小学生」、んでもって今は「中学生入学したて」みたいな感じだ。入学したてならば、それはまだ小学生の高学年と言っても過言ではないだろう。それでいきなりハードな・・・、性

教育・・・、は、問題がある。
　ならばやんわり教えれば良いのだろうが、残念なことに俺にはそういう能力は無い。勉強関連の事となると、どうしてもいきなり高度なところから始まってしまうのだ。いくらいずれ経験するかもしれないことであっても、「勉強」という名目の元でやってしまうと収まりがつかなくなってしまう。下手したら実演する可能性も・・・。
「とにかく、今度進化するときはなるべく俺に言うようにしてからしてくれ。分かったな？」
「なんでか知らないけど、うん、分かった。」
「まぁ覚えてればの話ですけどね。」
「頼む、覚えておいてくれ・・・。」
「ぁぅぁぅ、検討しておきましょう。」
・・・ピジョン、そう言わなくても良いだろう・・・。
「そう言えば、ピジョンになってから「ぁぅ」の回数が増えましたね？」
「ぁぅぁぅ、そうですか？・・・あ、ホントだ。」
「へぇ、やっぱり進化すると何か変わってしまうもんなんだな。じゃあフシギソウとカメールはどうだ？」
外見で言えば、少し背が伸びたよな。あと、女性らしい体つきになってきてる。・・・どの辺が、と言うのは皆さんなら分かるだろう。
「う～ん、そうですね・・・。個人的にはこれと言って変化は感じないです。」
「私もそうかな。前と同じ、・・・と思う。」
２人はそう言ってるが、絶対に何か変わってるはずだ。精神年齢が上がったんだから。でも、今の段階では分からないな・・・。まぁ、いずれ分かるだろう。
「とにかく、３人も進化したんだ。これは戦力に大きな差ができたぞ！」
「少しはバトルも楽になるでしょうか・・・？」

「もちろん！お前達がいてくれれば百人力だ！」
3人はそれを聞くと、嬉しそうな顔をした。うん、やっぱり、こいつらには笑顔が一番だ！
・・・と、なんだかピカチュウが空気だが、・・・生きてるか・・・？
「・・・なに？」
「ああ、いや。なんでもないよ。」
ちゃんと生きてた。って当たり前か？
「ま、まぁこれで、ようやくおつきみやまに入れるわけだ。みんな、覚悟は良いか？」
「ぁぅぁぅ、覚悟って、何の覚悟ですか？」
・・・ピジョンのこの質問癖は、どうやら進化しても治らないらしいな。ま、別に良いか。
「とにかく。ちゃっちゃとおつきみやまを越えて、ハナダまで行くぞ！」
「はい！」
「うん！」
「ぁぅぁぅ！」
「・・・ふぁいと、おー。」
そして俺たちは、おつきみやまへと入って行った。

ああ、続いてしまうんだろうか！！

ニビジム～おつきみやま（後書き）

はい、お疲れ様でした～。いやぁ、やっと進化しましたねぇ、あの3人。進化シーンに関しては、まぁ、あれです。ムラムラしてました。申し訳ありません・・・。

と、ここで登場萌えもんの詳細設定まがいな物を出してみましょうか。

身長比は、小さい順に　進化前はピカチュウ・ポッポ・フシギダネ・ゼニガメ　の順。進化後はピカチュウ・フシギソウ・ピジョン・カメール　の順です。フシギソウがピジョンに越されましたが、これはあくまで私の趣味です。ご了承下さい。

次に、必要なのか分かりませんが、スタイルに関して。作中で憲明が言っていましたが、彼女達の人間年齢は進化前：小学生くらい、進化後：中学入学したて　ですので、それに合った体型です。

紳士な皆さんのために言いますが、胸は小さい順に　ピカチュウ・ピジョン・フシギソウ・カメール　となってます。ええ、これも趣味です。私それなりにロリコンなんで、嫁は一番つるぺたにしました。あ、別に大きいのが嫌いってわけではないですよ？　ただ、よく同人誌とかで見るあの爆乳は嫌いですね。あれはやり過ぎなのではないかと。個人的にベストなのはC辺りですかね。なんて言うのか、そう、アレだからです。

と、思いっ切り私の性癖を露呈してしまいましたが、忘れてください。

それでは、今回はこの辺で～。

おつきみやまの謎（前書き）

随分お待たせして申し訳ありませんm（＿＿）m
しかもお待たせした割に全然進んでいないのはご了承下さい・・・。
一杯一杯なんです（＾＾；
それでは、続きをお楽しみ下さい。

おつきみやまの謎

「うわ！　なんなんだここは・・・！　えぇい、あっち行け！」
「ま、ますたー！　私じゃ相性悪くて、・・・うぅ、そろそろ限界です・・・！」
「が、頑張れフシギソウ！　残りのみんな、大丈夫か！？」
「ぁぅぁぅ、なんとか大丈夫ですけど・・・、数が多すぎです・・・！」
「あぁもう鬱陶しいよ！　あっち行って！」
「・・・そろそろ、でんきショック出せなくなりそう・・・。」
「マジでか！？　クソ、一旦戻るぞ！！」
開始早々慌しくて申し訳ない・・・。実は今、ズバットの大群に襲われていたところなのだ。なんであんな幼ｊ（ｒｙ　子供に、我が血を狙われなければならんのだ！？　おつきみやまに入って早速こんなことになるなんて・・・、情報収集が足りなかったか！
　だが、いくら悔やんでも仕方ない。今のところはみんなを休ませて、どうするべきか考えよう・・・。そして俺たちは、再び萌えもんセンターへと戻ってきた。
「はぁ～～・・・。なんだったんだあのズバット達は・・・。」
「何か、異常とかあったんでしょうか・・・？」
「さてなぁ。萌えもんの事情は人間の俺には分からん・・・。」
「ぁぅぁぅ、私もさっぱり分からないです・・・。」
「あぁ～もぉ～～～！！　なんか無性に腹が立ってきたーー！！」
「・・・お腹すいた・・・。」
ハハハ、ピカチュウは気楽そうだ・・・。と、笑ってる場合じゃないよな。打開策を考えなければ。
　まず考えなければならないのは、なぜズバット達はあんなに暴れていたのか、ということだ。いくら野生の萌えもんだからって、余程凶暴でなければ襲ってくるなんてことはないはず。だとすると、

絶対に何らかの原因がある。その原因をどうにかして入手しなければ・・・。
　でも、どうやって調査すれば良いんだろうか。ズバット達に聞くのはちょっと困難そうだし、ここは取り敢えず、近くにいる人に聞いたほうが良いだろう。・・・もし誰も知らなかったら、ズバット達に聞くほか無いな。

ということで、俺達は時間削減のため分かれて調査を開始した。俺とピカチュウは近くにいた男の人に声をかけることに、フシギソウは新聞を読んでいる渋い男性、カメールは短パンを穿いた少年、ピジョンは禿げた親父のところへ向かった。
「すいません、ちょっといいですか？」
「ん、何か？」
「実は、これこれしかじかということがありまして、何か知りませんか？」
「・・・知りませんか・・・？」
（すっごい端折ったなこいつ・・・。）「いや、何も知らないなぁ・・・。」
「そうですか・・・。すいません、ありがとうございました。」
「・・・ありがとう。」
男の人は少し戸惑ったような顔をしつつ、ペコリと頭を下げた。
「あの人が知らないとなると、残りの人たちに賭けるしかないな。何か収獲があると良いんだが・・・。」
「・・・うん。」
・・・このピカチュウ、どうも反応がワンテンポ遅いよなぁ・・・。そう言えば、初めて会ったとき泣いてたっけ？　まだ事情聞いてなかったな。まぁ、今はそんなことよりもズバット達のほうが先だが。
　と、そんなことを考えていると、フシギソウとカメール2人同時に帰ってきた。・・・2人の顔から察するに、・・・・・。

「ダメだったか。」
「はい。あの人、新聞を見ながら「新聞にR団の事が載らない日は無いな・・・。」ってずっと呟いてました。」
「私のほうは、なんか「そんなことより一緒に来ないか？」って誘われたよ。勿論断って一発泡吹いてやったよ。」
「べ、別にそこまですることはないだろうに・・・。」
それに、『萌えもん』のカメールが泡を吹くって言うと、なんかちょっと・・・。なぁ？
「ところで、ピジョンはどうした？　まだ話が終わってないのか？」
俺がピジョンのほうに目をやると、何やら困ったような顔をしていた。どうも、親父に何やら良からぬことを言われているらしい。俺達は急いでピジョンのところへ向かった。
「ピジョン、どうした？」
「ぁぅぁぅ、ますたー、丁度良いところに来てくれました・・・。」
ピジョンはそう言うと、俺の後ろに隠れてしまった。
「な、どうした？」
「ぁぅぁぅ・・・。この人が、なんか変なことを言うんです・・・。」
「変なこと？」
まぁ確かに、このハゲ親父、変なことを言いそうな顔ではあるが・・・。とにかく、話を聞いてみよう。・・・で、何て聞けば良いんだ・・・？
「えっと、すいませんが、うちのピジョンに何を・・・？」
「おお、あなたがこの子のマスターさんですね！？」
「え・・・、いやまぁ、そうですけど・・・。」
「それは良かった！　あなただ・け・に！　とっておきの話がありまして！」
俺だけにとっておき？　はて、なんだろうか・・・。まぁどうせ、大した話でもないだろうが・・・。
「普通じゃ滅多に会えない珍しい萌えもんがたったの５００円！

どうです、こんなオイシイ話、そうそう聞けるものではないですよ！！」
「萌えもんが５００円・・・？」
「そうです！　勿論買いますよね！！」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。これは、ちょっと無視できる話ではないな・・・。
「・・・おい、あんた。自分が何やってるのか分かってるのか？」
「ええ、勿論分かってますよ。珍しい萌えもんをあなたに５００円であげましょう、こう言ってるんです。」
「んなこたぁ分かってる。俺が聞きたいのは、何でそんな珍しい萌えもんをたったの５００円で売るのか、ってことだ。そんなに珍しいなら、売らずに自分で持っていれば良いじゃないか。」
「う〝・・・。いや、まぁ、私はですね、折角の珍しい萌えもんですし、私が持っているよりも他の人が持っていたほうが良いのではないかと思って・・・。」
「じゃ、「俺だけにとっておきのオイシイ話」じゃないじゃん。」
親父はついに顔を引き攣らせながら、口をパクパクし始めた。・・・もっと何かしらの抵抗をするかと思っていたが、・・・張り合い無いな。
「親父さんよぉ。言っておくが、萌えもんって言うのは自分で頑張ってゲットしないといけないんだぞ？　これは人として当然のことであり、決して破ってはいけない人間と萌えもんとの暗黙の了解でもあるんだ。それに、人から貰った萌えもんはあまり懐いてくれないし、貰った当人も、それだとあんまり育てる気にはなれないものだ。まぁもし懐いてくれなくても、ずっと育てていればその内懐いてくれるかもしれないな。が、・・・そんなの、いつになるか分かったもんじゃないだろ？　と、ここでちょっと気付いて欲しいことがある。親父さん、何か分かるか？　何？　分からんだと！？　まぁいいさ、説明してやろう。特別サービスだ！　今言った「懐かないから育てる気にならない」、これを萌えもん側の気持ちで考えて

みよう。ここまで俺達側の気持ちだったからな。さぁ親父さん、今からあんたは萌えもんだ。いや、あくまで想像の話だぞ？　何も格好を萌えもんっぽくしなくても良い。それだと逆に気持ち悪い。おっと、話がそれそうだな。修正しよう。で、あんたは萌えもんだ。ある日あんたは人間にゲットされてしまう。そこであんたはこう思う。「しょうがない、ゲットされてしまったからにはこの人の言うことを聞こう・・・。」。だがしかし、あんたはゲットした人間から違う人間に何の説明もなしに渡されてしまった。さぁ、あんたならどう思う？　多分こう思うんじゃないか？　「え？　何で私はこの人のところにいるの？　私はあの人にゲットされたのに！！　もしかして、私、売られたの・・・？」。さぁ、こう思ってしまったらお終いだ。なぜかって？　簡単だ、いきなり知らない人に売られたんだぜ？　普通だったら人間不信に陥ってもおかしくは無いだろうが！　野生の萌えもんにとって見れば人間なんて全く未知の生物だ、どんな考えを持っているかなんて分からない。で、初めて出会った人間に売られてしまった。本当はまともな人間もいるんだが、売られてしまった萌えもんにとって見ればそれが人間と言う生物の姿と言うことになってしまう。・・・あー、何だか自分で言ってててこんがらがって来た！　おっと、「こんがらがる」って言ってもＰＣ－９８時代の東○Ｐｒｏｊｅｃｔに出て来た「コンガラ」とは恐らく一切の関係は無いから安心しろよ？　って何の話をしてるんだ馬鹿者！！　誰が○方の話をしろと言った！　この口か！　この口かんん！？　つまり俺が言いたいのは、たった２つの条件で「懐かないから育てる気にならない」、「育てないから懐く気にならない」という無限ループに陥ってしまうと言いたいんだ！！　どうだ、たった２つだぞ！？　たった２つの条件で無限ループの罠に掛かってしまうなんて、プログラミングとかそこら辺でしか現実ではないぞ！！？　そんな数％の悪夢をあんたは人に与えようとしてるんだ！

あんた、ここまで言われてその萌えもんを売りたいと思うか！？

俺は思わない！　人間と萌えもん、両方の幸せを思うなら、そん

な最悪の事態に陥るようなことはしない！！　それが良心というものだ！　あんたにはその良心の欠片も無いのか！？　この鬼！　悪魔！！　この世に生を受けて誰しもが持つ良心を、あんたは捨てたのか！？　大丈夫、まだ間に合う！　ここで踏み止まっていた方が良い！！　さぁ、俺に手を差し伸ばせ！　俺があんたの周りに纏わりついている魔手から引き上げてやる！！　さぁ、この俺の熱く燃え上がる良心の塊の手を、力強く掴むんだっ！！！！！」
俺がグッと手を伸ばすと、親父は涙を拭いながら、力強く俺の手を掴んだ。そして親父は大声で泣きながら、今自分が行っていた行為を恥じ、そして二度と行わないと誓った・・・。

「ますたー、何だかよく分からなかったけどすごかったですね！
気付いてみたら他の人たちも涙を流してましたよ！」
「いやぁ、思ったことをそのまま、某人物の固有結界を真似ながら言っただけだから・・・。」
「ぁぅぁぅ、でも話してる時ますたーの身体から放たれるオーラには熱く燃える何かがありましたよ！」
あはは、そこまで言われると照れるな・・・。
　と、ふと冷たい視線を感じた。振り返ると、・・・まぁ予想通りというか、カメールがジト目で俺を睨んでいた。
「ますたー、もしかして・・・。」
「な、なんだカメール・・・。俺は決して某動画共有サイトの中毒ではないぞ。ネタ2つだったし・・・。」
「でもそれを知ってる時点で・・・、ねぇ？」
「・・・でもそれって、私たちの存在を否定してるのと同じだよね。」
ピカチュウ、なんと辛口なコメント・・・！　これにはカメールも閉口せざるを得ないようだ。っていうか、この子意外と現実的だな・・・。

「まぁそんなことより、結局ズバット達のことは分からなかったな・・・。」
「そうですね、何の収獲も・・・・。」
はぁ～～～・・・。俺達は長ぁい溜め息をつき、がっくりと肩を落とした。
　と、その時。不意に誰かが俺の服をちょいちょい、と引っ張った。引っ張られた位置からして恐らく子供だろうか、俺はそこに目をやった。そこにいたのは、・・・誰だ？
「ちょ、あんた種族くらいは知ってるでしょ！」
「いや、まぁ知ってはいるが。あいにく俺のメンバーに水タイプはいるんでな、お前を加えるわけにはいかないんだよね・・・。」
「別に加えて欲しくなんか無いよ！　あたいはあんたに情報を与えにきたの！」
「へ、情報？」
どうもこのコイキング、ズバット達のことについて何か知っているらしい。・・・まぁ、情報をくれるのは有り難いのだが、・・・コイキングって、確か・・・。
「分かりにくく言えば『マルキュー』だよな？」
「な、ちがうもん！　あたい『マルキュー』じゃない！」
「い、意味知ってたか・・・。でもコイキングの上に一人称が「あたい」だと、どうしてもイメージが『マルキュー』になってしまうんだよ・・・。」
「じゃあ何か問題出してよ！　答えるから！」
ほぅ、問題とな？　それなら、・・・どうしようかな。
「じゃあ、これ解いてみろ。１＋１＝？」
「２！」
お、正解だ。
「じゃあ次。１＋２＝？」
「３！」
「３の３乗÷２＝？」

「13．5！」
え、解けんのかよ。案外『マルキュー』じゃないかも・・・。
「最後の問題。・・・あ、でもこれはちょっとマニアックかな・・・。」
「何よ！　早く出してよ！」
「分かった分かった。実はそこの柱とかに使われている鉄って純粋な鉄ではないんだ。何かと結合してるんだけど、・・・さて、それは何？」
「炭素！」
え、知ってるのか。普通はあんまり知らないとばかり思ってたが・・・。
「すごいな、お前・・・。取り敢えず『マルキュー』じゃないのは分かったぜ。じゃあちなみにその鉄の事はなんて言うか、教えてくれ。」
「え！？　あれ、なんだっけ・・・？」
そう言うと、コイキングは頭を抱えて悶絶し始めた。・・・なんでそこは知らないんだろうか。
「正解は炭素鋼だ。もういいぞ、起きろ。」
「うぅ・・・。あんたいじわるだよ・・・。」
「いや、別にいじわるではないと思うんだが・・・。」
って言うか、結合してるもの知ってたら名称も知ってると思うぞ、普通は。
「で。確かお前何か情報をくれに来たんだったよな？」
「あ、そう言えばそうだったね。すっかり忘れてたよ。」
コイキングはあっはっはっは！　と高らかに笑った。はっきり言って迷惑な笑い声だ。
「それでさ、その情報っていうのはおつきみやまのことだよな？」
「うん、そうだよ。」
コイキングはこくりと頷くと、懐から小さな紙切れを取り出した。大体、メモ用紙くらいの大きさだろうか。

「こほん！　えっとねー。おつきみやまで異変が起こったのは昨日なの。」
「咳払いをする必要があったのかは謎だが、・・・本当か？」
「うん。詳しく話すと日が暮れちゃわないけど、いい？」
・・・こいつ、やりにくいなぁ・・・。まぁいいや。俺は先を話すよう促した。
「あんた達、R団って知ってる？」
「R団？　確か、萌えもんを使って悪いことをしようぜ、っていう組織のことだよな？」
「そう。で、そいつらがおつきみやまで異変を起こしてる犯人なのさ。」
まさかあのR団が・・・。出来れば関わり合いになりたいくない連中No．1なんだがなぁ・・・。しかし、なんでまたR団はおつきみやまなんかに来たのだろうか・・・？
「う～ん、流石にあたいはそこまで知らないよ。今分かってるのはこれ位。」
「そうか。ありがとな、わざわざ情報を提供してくれて。」
「なんの、いいってことよ！」
コイキングはそう言ってグッと親指を立てた。笑顔が無駄に眩しいぜ・・・。
「ところで、報酬。」
「結局それが望みかこのヤロウッ！！」

コイキングに５００円カツアゲされた俺たちは、再びおつきみやま入り口前に来た。
・・・入ったらまた幼ｊ（ｒｙ　ズバット達に襲われるんだろうな。それを考えると・・・、・・・ハァ・・・。
「ますたー、ちょっといいですか？」
「ん、どうしたフシギソウ？」

呼ばれて振り返ってみれば、フシギソウが少し離れたところで手招きしていた。俺が近付くと、フシギソウは辺りを見回し、そっと耳打ちしてきた。
「次の町に着いたら、萌えもんセンターの2階に来てください。お話したいことがあるんです。」
「話？　それって今じゃダメなのか？」
「はい・・・。とにかく、萌えもんセンターの2階に来てくださいね。」
フシギソウはそれだけ言うと、タタタッ、とカメールたちのところへ走っていってしまった。
（今この場じゃ言えない話・・・？　はて、なんだろうか・・・。
まぁとにかく、今はこの山を越えることが先決だ。ちゃっちゃと越えて、そのここじゃ言えない話とやらを聞いてやろうじゃないか！）
俺は両頬をパンパンと叩き、うしっ、と覚悟を決めた。そして我が愛しの萌えもんたちとともに、R団が潜むおつきみやまへと侵入した・・・。

いいとこで続く

おつきみやまの謎（後書き）

さて、今回の話はいかがでしたでしょうか？
実のところを言うと、この小説の冒頭の部分は前話を書き終わってからもう直ぐ書き始めていて、本来ならばもうとっくの昔に投稿が終了しているはずだったんです。
それなのに気付けば日が経ち、あっという間に私も高２（仮）です。時の流れって恐ろしいですね（＾＾；

さて、次回はいよいよＲ団が出てくる予定です。憲明（だったっけ？　放置してたから名前よく覚えてませんｏｒｚ）達とどういう風に絡ませるのかはまだ未定です。ついでに言うとフシギソウの話したい事も未定です。・・・こんなんで大丈夫かなぁ（＾＾；
それでは、多分また更新ストップするかもですが、そこはどこぞの漫画家を思い出しながらお待ち下さい。
有難うございました。

追記
日別アクセス数見てみたら４月１４日のアクセス数が２０００件超えてました！
なんですか、バグですかこれ（＾＾；

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1614f/

俺の嫁は萌えもん

2010年10月20日19時35分発行